

季刊

史料と伊能凶

一九九七年春季号

伊能忠敬

研究

「伊能凶探究」継承 第一号



伊能忠敬研究会

目次

(表紙写真解説) 目次

報告

伊能忠敬と測地尺度

藤岡 健夫

1

講演 (佐原例会の講演要旨)

伊能忠敬との出会い (承前)

小島 一仁

5

報告

人生を貫く紐

伊能 敬

10

史料紹介

伊能家(世田谷)文書紹介

「坂部さん、おつかれさまでした」

安藤由紀子

12

源空寺墓碑建立始末 その二

伊能 陽子

17

伊能測量の地域史料

滋賀県日野町松尾地区に残る先触れなど

香取 禮良

20

連載

第六次測量日記(四)

佐久間達夫

23

伊能図探究 十一

藤岡健夫氏(横浜市在住)蔵 九州第二次測量大図

藤岡 健夫

27

国立公文書館内閣文庫蔵 特別小図(皇国全図)

国立歴史民俗博物館蔵

29

国立歴史民俗博物館蔵 伊能図(秋岡コレクション)について

伊能図(秋岡コレクション)

30

国立国会図書館古典籍室蔵カナ書き特別小図

国立国会図書館

32

お知らせ

入会案内・投稿規定・編集後記

編集部

33

阿部正道氏蔵 伊能小図(蝦夷地 部分)

幕末の開明派の老中・阿部正弘の後裔の正道氏(文京区本郷)

は、正弘が写させた文政四年版の伊能小図(蝦夷地の部)を所蔵する。御承知のように文政四年の最終版伊能小図は、蝦夷地、本州中部、日本西南部の三枚構成であるが、現存数は大変少ない。国内では神戸市立図書館に日本西南部と蝦夷地の二枚を所蔵するほか、阿部氏が蝦夷地を、また平戸の松浦史料博物館に九州のみの図を所蔵するだけである。

阿部小図は幕末に製作されたことが明らかな写本で、丁寧な描画である。題名は「実測輿地全図 松前 蝦夷」。縦一六二、横一八二センチ。折本。文字は達筆で、彩色は比較的濃く、全体が美麗である。経緯線、方位線があり、宿場、天測地点の表示もある。神戸市立博物館小図と同レベルの写本である。

シーボルト事件で、伊能グループは壊滅させられたが、幕末の必要時期に、鳴りを潜めていた残った人達が活動をはじめたか、新たな写図グループが出現したかの何れかであろう。

(渡辺)

(題字は忠敬の筆跡)

伊能忠敬と測地尺度

藤岡 健夫

千葉県佐原市にある忠敬記念館には、忠敬が使用した二本の尺度(ものさし)が展示されている。これは、かつて伊能家の土蔵に、錦の袋に納められて、保管されていたという。何れも一尺の尺度で、全体の大きさと、構造が少し違っている。

大谷氏の名著「伊能忠敬」には、大きい方の尺度については、その寸法と形状が、小さい方の尺度については、寸法のみが尺貫法単位で詳しく記されている。これを元に寸法をミリに換算して、現代風の図面してみると、図1の通りである。即ち、長さが三六〇ミリ、幅が四二ミリ、厚さが四ミリほどの真鍮の板に、長さ方向に三・一五ミリの間隔で、十一本の平行線が刻まれており、これに直角に一分毎に目盛が入っていて、一尺の尺度になっている。更に図のように一分毎に対角斜線が刻まれていて、十一本の平行線と交わっている。この尺度には計算尺のカーソルのような、同じく真鍮製の副尺が付いており、これを滑らせて副尺の一端と、斜線との交点を読み取ることににより、厘の値まで読むことが出来る構造になっている。また副尺には、蝶ネジが付いていて、随所で固定できるようにになっている。尺度の一边には、副尺が尺度に密着してスムーズに動き、かつ蝶ネジで固定しやすいうように、幅五・五ミリ、厚さ三・六ミリほどの細長い真鍮の板がネジで固定されている。

尺度は、一方の端を起点として目盛られ、他端は線を引いて終わっていて、何か或る装置に一端を密着して取り付けて測定するのに便利な構造になっている。従って、この尺度は太陽の高度を測るのに用い

た圭表儀に附属していたものと考えられる。裏面には、田中丹柳作の銘が入っている。

もう一つの尺度は、右記の尺度に比べて、少し小さく、長さは三四五ミリ、幅が三八ミリ、厚さは三・六ミリほどで、同じように一分毎に対角斜線が刻まれ、副尺が付いている。左記の尺度と比べて細い板は取り付けてなく、この点構造は簡単である。目盛の入れ方は、両端とも線が刻まれていて、一般に見かける尺度の形になっている。(世の中には両端を基準に目盛られているものもある)この尺度は、無銘である。

二本の尺度については、先の大谷氏の「伊能忠敬」の中に、明治四二年に東京帝国大学の理学部で、実測した時の値が記されている。その値は、表1の通りである。

これらの尺度のように、目盛に対角斜線を入れて、細かい値を読み取る方法は、デンマークの天文学者で、各種の天体観測装置も開発したテイコ・ブラーエ(一五四六—一六〇二)が考えて実用化したものである。忠敬が使用した象限儀などの角度の目盛読み取りにも、すべて対角斜線方式が使われている。但し、角度の読み取りの場合、十一本の平行線に代わって、六分割して七本、または十分割して十一本の同心円が刻まれており、外側になるほど間隔は開いている。ちなみに、テイコ・ブラーエより遅れてフランスのバーニアが一六三一年に対角斜線方式より読み取り易く、精度も良い副尺目盛方式を考案した。これをバーニア式というが、忠敬時代になってもこの方式が、採用されなかったのは、日本に未だ伝わっていなかったか、或いは作り方が難しかったからであろうか。このバーニア方式は、現在広く利用され工作現場で使われているノギス(挟み尺)には、バーニアの副尺が付いていて、二〇分の一ミリまで読みとれるようになっている。

対角斜線を引いた尺度は、細かくは読めても実際の地図の作図に当たっては、不便であったようである。忠敬の高弟渡辺慎が述べた伊能東河先生流量地伝習録によると、「一厘尺（著者註　ここでは作図用の尺度のこと）ハ対角線モリタルハ、微細ナレドモ却テ宜シカラズ。長サ五寸、七寸、乃至一尺ニ片刃シノギヲツケ、二厘ツツ平ニ目モリシタルヲ便利トス」と記されている。（図2）つまり現在我々が製図で使用しているような片側に刃の付いた先に目盛の入った尺度が便利に使われたのである。二厘という約〇・六ミリである。

精密な測定に当たっては、温度の影響も考えなくてはならない。温度の影響は当時既に知られており、間重富は、高橋至時への書簡の中で、鉄、真鍮、銅など金物には、温度の影響があり、種類によって差のあることを伝えている。従って、忠敬もこのことは、知っていたと思う。しかし、残された文書には、間縄などについての湿気の影響には、細かく注意しているが、温度変化による尺度の伸びについては、触れていない。これは湿気の影響に比べて、温度の影響は、桁違いに小さく、測量上は無視できたものと思う。

次に、忠敬と折衷尺について述べる。小学館発行の大日本百科事典で、度量衡の項目を見ると、「伊能忠敬は日本全国の測量の規準として、念仏尺と又四郎尺の間をとったが、これは折衷尺といわれる。これが維新後の明治政府の尺に採用された」と記されている。この元を質すと、次ぎのような事実が浮かびあがってくる。

明治の時代になって、政府は、近代国家として、急いで度量衡の制度を確立する必要に迫られ、度量衡の所管官庁は、大蔵省となった。その後、いろいろ議論を経て日本は、標準とすべき尺度（かねじやく、曲尺、矩尺のこと、裁縫に用いた鯨尺等とは違う）として、折衷尺を採用することになったのである。この時、大蔵省の顧問役でもあった

内田五観（いつみ）という人が次ぎのように述べたのである。「折衷尺ハ、享保尺ト又四郎尺トヲ折衷セシ尺ニシテ、寛政中、伊能忠敬日本海湾測量並ビニ、製図ニ用ユル曲尺ノ長短不同ナルニ窮シ、新タニ此ノ尺ヲ製シテ用イシモノナリ」と。享保尺は、又四郎尺に比べて、四厘長い。そこで二つの尺度を折衷して、享保尺より二厘短く、又四郎尺より二厘長い尺度を作りこれを折衷尺と名付けたという。いかにももつともな話である。

この内田五観氏は、幕末から、明治初年に活躍した人で、和算家であり、各種尺度の収集家でもあり、明治政府に太陽曆を採用させたなかなかの実力者であった。所管の役人は、五観氏の意見をそのまま信じて、「一尺の標準になった折衷尺は、伊能忠敬が作ったものである」と公表したことが、「折衷尺は、忠敬が作ったもの」という話として定着したようである。

しかし、この話には大谷氏の「伊能忠敬」その他の著書でいろいろな疑問が出されている。忠敬の残した記録の中には、先に述べた厘尺について書いたものはあるが、折衷尺については、何の記録も残っていない。五観氏が言うように尺度の不一致に困り、忠敬の発案で新たに折衷尺を作ったものであれば、どこかにその記録が残っているはずであるが、それが無いのが不思議である。

そもそも江戸時代、尺度の長さは、統一されていなかった。世の中では、念仏尺、又四郎尺、享保尺、その他の尺度が使われていた。念仏尺は、近江国伊吹山にあった念仏塔場に刻み込まれていた目盛から写し取ったといい、主として京都で竹を材料にした尺度を作っていた職人が標準としたもので、別名竹尺とも呼ばれている。又四郎尺は、室町時代、又四郎という尺度作りの工匠が作った尺度を標準にしたものであるという。また享保尺には、次ぎのような伝説がある。紀州の

熊野神社に古くから伝わる尺度があった。享保年間に、紀州出身の將軍吉宗がこれを写し取らせて尺度を作り、これこそが正しい尺度だとした。これが享保尺の由来であり、長さは竹尺にほぼ等しく、又四郎尺より4厘長い。これは、幕府司天台の観測器にも使用したという。熊野神社に伝わるその古尺は、明治二三年の大洪水にあって、その後行方不明になってしまった由である。

一尺の長さが、使う尺度によってまちまちであったとは言っても、精々一分以内であった。従って、幕府も尺度の製造については、特に規制はしなかった。今考えると、幕府の規制がなくて、よくこの範囲で治まっていたものと思う。これに比べて、榦と秤について幕府は、榦座、秤座を置き厳しく取り締まり、偽造には極刑を科した。

世が替わって明治政府になると、海外からは、西洋の文物と共にヤード、ポンド法も入って来るし、フランスからは、長さの基準を地球の大きさととった国際的的制度として、メートル法も入ってきた。世の中には、この際日本語を止めて、今後英語を国語にすべしと言うような極端な意見も出てきた当時である。度量衡制度の所管となった担当官としては、外国の制度を睨んでいろいろ迷ったことであろう。

ここで担当官は、いずれは日本でも欧米の度量衡制度を採用しなければならなくなるであろう。従ってその換算値も判り易い値にしておく必要があると考えたようである。日本では、丈、尺、以下の単位は十進法であり、メートル法も十進法、しかも地球の大きさを、長さの基準に取っていることも魅力的である。ここで日本として採り入れるなればメートル法と考えたのも当然のような気がする。これは今考えて、大変賢明な策であったと思う。

初め大蔵省は、一尺が、一メートルの大体三分の一であることから一尺を三分の一メートルとする案を考えた。ところがこれは、従来の

一尺より一割も長くなるので、議会の反対多数で否決されてしまった。次ぎは、享保尺を一尺の正当尺としたが、享保尺で榦を作ると、当時一般に流通していた榦より、僅かではあるが、大きな榦になってしまった。榦の大小は、年貢米の多寡にひびく。これも反対が多くて通らなかった。困った大蔵省は、当時世に出回っていた三〇余種の尺度について、長さを調べたところ、その3分の2はほぼ折衷尺に近く、榦作りの寸法ともよく合ったと言う。更に幸いなことに、この折衷尺の一尺は、一メートルの三三分の一〇としても一致する。先に三分の一では失敗したが、三をもう一つ増やして三三分の一〇とすればよい。そこで今度は、折衷尺を正当尺とする案を通す理由をいろいろ考えたようである。三〇種類の尺度の平均値だとか、一メートルの三三分の一〇とか言っては、昔かたぎの職人には、受け入れ難い。また反対が出ては困る。

思うに念仏尺は、念仏塔場に刻み込まれていた寸法から取られたという。享保尺は、熊野神社に伝わる古尺に拠ったという。又四郎尺は遠く室町時代の工匠が作ったという。何れも伝説的な話で権威つけられている。そこで、明治の初めになり、日本の地図を作った人として、大いに尊敬されていた伊能忠敬先生に注目して考えられたのが、先に述べた「折衷尺は、伊能忠敬がつくったものである」と言う話ではなからうか。この筋書を作った知恵者は、五観氏ではないかと考えられる。その後、折衷尺は、日本の標準尺として反対意見もなく、すんなり決まって、維新以来もめ続けた標準尺度の一件は、これにて落着いたようである。これは明治十年頃の話である。この後、明治二四年の日本度量衡法の制定によって、一尺が一メートルの三三分の一〇という値も、正式に決まったのである。伊能忠敬は、泉下で「折衷尺は、拙者が考えたと言っておるが、さようなことはあらんよ」と苦笑

図1 尺度

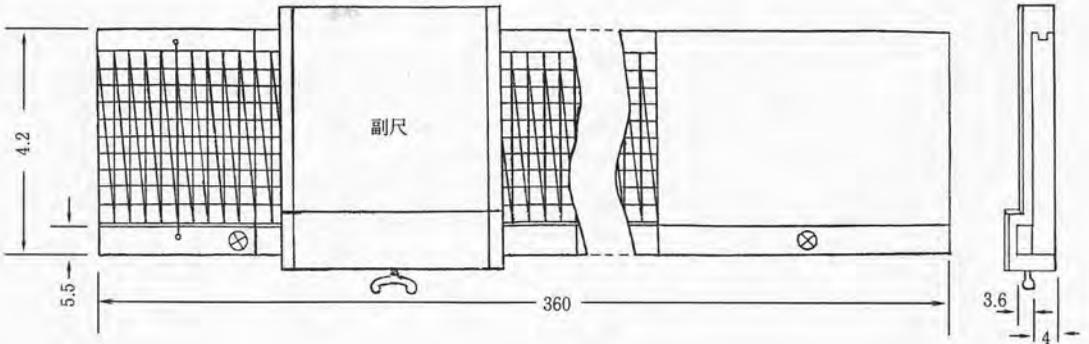


図2 厘尺

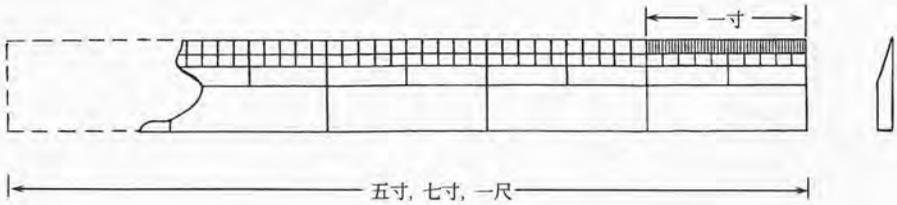


表1 忠敬所蔵尺度の実測値

種 類	メートル (15°C)
田中丹柳作尺度	0. 3 0 3 2 5
無銘 尺度	0. 3 0 3 3 6

表2 享保尺、折衷尺、又四郎尺の実測値

種 類	製作者	称呼寸法	実測値mm (15°C)
享保尺	吉 明	標 準	303.63
折衷尺	大野規行	享保尺の 1002/1004	303.04
又四郎尺	大野規行	享保尺の 1000/1004	302.58

しているかも知れない。

それでは、先に記した記念館にある尺度は、享保、折衷何れの尺度に当たるものかという疑問が湧く。享保尺、折衷尺、又四郎(木匠尺)は、何れも五観氏が所有していたものが、その後計量研究所を経て、現在国立科学博物館にあるという。これを昭和一六年に、天野技師が測定した実測値が、小泉袈裟勝氏の著書「ものさし」に記載されている。その値は、表2の通りである。これで見ると、忠敬が残した尺度(表1)の長さは、享保尺と折衷尺のほぼ中間に当たる。ここでもう一つの疑念が出て来る。表1の忠敬の尺度の実測値の精度である。この実測値は、大谷氏が、その著者「伊能忠敬」の中で、その測定法に一部不十分な点のあることを指摘している。この尺度は、東京帝国大学で明治四二年に測定されてから、既に九〇年近くになる。この辺で最新の計測器により、改めて精密な実測が必要ではないだろうか。

主な参考文献

大谷亮吉 伊能忠敬 岩波書店

保柳睦美 伊能忠敬の科学的業績 古今書院

小泉袈裟勝 ものさし 法政大学出版局

九六年度 佐原例会の講演

伊能忠敬との出会い (承前)

小島 一仁

「四千万歩の男」から

ところが読んでみると、向こうは思い違いをしたらしいのです。つまり、この小島という佐原の住人は郷土史家かもしれない。井上ひさしが佐原の伊能家の悪口を言ったものだから、けなされたというので怒っている、というふうに思ったらしいのです。それですぐ手紙をよこしました。どう書いてあったか。「あなたは伊能家および伊能忠敬のことについて調べるのに、伊能家の資料ばかり調べている。あなたはやたらに『旌門金鏡類録』という資料を振り回すけれども、それは伊能家の名譽のために書かれたものであって、伊能家に都合のいいことばかり書いてあるのだ、私はそういうものは信用しない。」ということです。

それでは井上ひさしがどこから愚に近き者というのを導き出したかという、水戸の学者で小宮山楓軒という漢学者がいました。忠敬より十九歳か二〇歳ぐらい年下で、ほぼ同時代の立派な学者です。この人の書いた日記兼随筆のようなものに「懷宝日札」というものがあります。その中に、「息子の三郎衛門は愚に近き者なれど、財産を譲りて少しも惜しまず」、つまり非常に愚か者であるけれども、伊能忠敬はそれに全財産を譲って少しも惜しまなかったという部分が確かにあるんです。「これは伊能家に味方しているわけではなくて、偉い学者の書いたものだから客観的な事実である、あなたは間違っている。」と真っ向から反論してきたわけです。

そこで、そう言われるならこちらも反論しなきゃいけない(笑)、というのでやったわけです。あなたは、「金鏡類録」は伊能家の味方ばかり書いて信用できないと言っけれども、確かにそれは伊能家の名譽を高めるために書いたものだから、伊能家の悪口は言わない。けれどもその中に佐原および伊能家に関する重要な事実が含まれているということをおあなたは知らなければいけない。これが第一点です。

もう一つは、あなたは小宮山楓軒の「懷宝日札」を金料玉条のようにこれは正しいと言っているけれども、そうではない。それは小宮山楓軒がすでに伊能忠敬は偉いという頭があって書いているのだから、それは事実を示しているものではなくて、小宮山楓軒の思想状況がそこに記されているにすぎないのだ。要するに資料批判というものはそういうふうにはやらなければいけないのだ。どの資料がよくてこっちが駄目だというのではなくて、資料を扱う場合にはその資料批判をして、正しく使うということが重要ではないのか、と反論しました。

そうしたらまたすぐに返事がきました(笑)。しかし「金鏡類録」の編集が伊能忠敬であるとか、百姓一揆をおさめたとかいうことは彼が全然知らないことだったからびっくりしてしまっただけです。結局三、四回手紙のやりとりをしたのですが、このときは私は非常に爽快感を味わいました。向こうも気持がよくなったようで、最後に来た手紙の結びにこう書いてありました。

「未知の学究と学問についてこうやって手紙のやりとりが可能だとは、そして自分がそれによって高められていくとは、この浮世もまんざらではありません。その意味でもあなたに感謝しております。」

私もおとなげなかったんですがね(笑)、そんなことを論争したってしょうがないんだけれども、しかしこの人は非常に気持がよかったですね。第一、一番気持がよかったのは手紙を出したらすぐに返事

をくれたということです。そして、「何月何日午前二時」なんて書いてます(笑)。そういう点でもこの井上ひさしという人は誠実な人であると思いました。

なお「四千万歩の男」が単行本になってからのを見たなら「愚に近き者」というところはなくなっていました。

小説家というのとはなかなかすぐに返事をくれませんよ。嫁にいった私の娘は高校時代に笹沢左保のファンで、やたらに読んでいました。ところが笹沢左保が茨城県の麻生にかなを振って「アザブ」と書いてたんです。そこで娘が、あれは地元では「アソウ」と言っています、という手紙を出したら、すぐに返事が来ました。私はこういうもので調べたのだが、それに「アザブ」とかなが振ってあったので、いきなりそれを信じてしまった。しかしあなたの言うほうが正しいのではないか、という手紙をくれました。これも感心しました。

だけど、笹沢左保さんの場合は普段はファンから手紙が来てもすぐに返事を出さなかったのだそうです。NHKの「日本史探訪」か何かで笹川に、さっき言った高橋氏と二人で笹川繁蔵を取材に来たことがあるんです。そのときに高橋氏から私の所へ電話がかかってきて、笹川に笹沢左保が来ている、娘さんから手紙をもらったそうだから娘さんを出してくれ、というわけで娘を電話口に出しました。そうしたら普通は返事を出さないんだけど、あのときは虫の居所がよかったです。かすぐ出しちゃったんだということで、後で向こうで大笑いしたそうです。「よかったねえ、出しておいて。あれで出さなかったら小島にこてんこてんに怒られるところだった」なんて、そんなことがあります。

松本清張の忠敬論

話は戻りますが、その後、松本清張さんが『文藝春秋』で伊能忠敬を取り上げました。今から一二年前の一九八四年の一月から一二月にかけて三回にわたって、表題は「老十九年の推歩」、一九年というのは測量をやっている期間が一七年で、後の二年間は地図を作りますから一九年になります。推歩というのは計算すると言うような意味です。これは「松本清張短篇小説館」と銘打っておりますが、小説ではなくて伝記でもないし、一つの研究みたいなものです。これに「房州佐原」が出てきたんです。

ただ、松本清張が三回を通じて言っている中で強烈に私に響いたのは、佐原の酒屋の主人であった伊能三郎衛門と、江戸へ出てからの測量家としての伊能忠敬とは全く区別して考えなければならぬという考え方です。簡単にいえば佐原は測量や地図には関係ないということです。測量には深川の黒江町の家から出ている。帰ってきて地図を作ったのも深川で、後には八丁堀の亀島町に移ったが、要するに江戸で仕事をやっている。佐原では地図に関する仕事は何もやってない。旧宅に伊能忠敬の書斎というのがあるけれども、江戸へ出てからあそこへ帰ってきて地図に関する仕事をやったということは資料の中には全然出てこないというわけです。

松本清張は一九三二年(昭和七年)の文部省の「史蹟報告書」を読んで書いているようなのですが、「文部省の役人は佐原でも地図の仕事をしたかのごとく書いています、これはさかしらの筆である」などというぶんはげしい表現をしておりますが、これは非常に思い切ったことです。私はこれを読むまでそういう議論は聞いたことがありません。測量家伊能忠敬は佐原とは全く関係がない、こういうふうには正面切ってズバットいった人は今まで一人もいなかったと思います。私は松本

清張のファンですから、そういう点ではさすがに松本清張らしいと思えました。

もちろん私はそれには反対ですよ。とんでもない話だ(笑)。伊能忠敬は佐原へ来たからこそ後の測量への道が進んで行けたのであって、佐原を抜きにして伊能忠敬の生涯を考えることは絶対にできない、というのが私の考え方ですから、そういう点では松本清張とは真っ向から対立するのですが、しかし清張自身が自分の思うところをズバット言ったということについては、いかにも清張らしいと思います。

それはそれでいいのですが、実はこの松本清張の文章には「房州佐原」のような間違いがやたらにあります。佐原のことを昔は城下町であつたかのごとく書いているんです。そして岩ヶ崎の城を佐原の城か何かと間違えているんですね。「岩ヶ崎城の築城をした。土民、これより参集した。」などと書いてあります。そしてそういうことばがあるかどうか知らないけれども、佐原のことを「廢城下町」城下町でなくなつた町と書いてあるんです。これはとんでもない間違いです。

それから測量器具などをしまつてあるのが、旧宅の小門を出て真っ直ぐに行つたお蔵の中であると書いてあります。つまり土蔵と記念館をゴッチャにしてしまつています。それから佐原の小野川のところにも、「出し」(船をつける場所)があると、「出し」がいまだに一軒一軒の前についているかのごとく書いています。今はその「出し」で洗濯する人もない、などと書いてあります。

彼は佐原に取材に来てははずなのですが、実は私は松本清張は取材に来なかつたのではないかと思ひました。つまり彼がこの文章を書く前に、『文藝春秋』の編集者が二度ばかり私のところへ来ています。松本清張さんが伊能忠敬について書くことになつたから、いろいろ教えてもらいたいこともあるからというので、二度ばかり取材に来

たんです。それで向こうの聞くことについては答えました。しかし松本清張さん自身は来なかつたのではないかとこの文章を見て思ひました。ところが実は後に来ているらしいことがわかつたので、何だか狐につままれたようです。

それで結局この問題はどうなつたのかというと、『文藝春秋』のほうからその雑誌を毎号送つてきて、最初の号が来たときに電話がかかつてきました。「いかがだつたでしょうか」というので、これはとても電話では話せない、めんどうだけれども手紙で書くからそちらで読んでくださいということ、ここがこういうふうにおかしいと、一生懸命に手紙を書きました。それは佐原の駅でだれかに会つたときに、『文藝春秋』に松本清張があんなことを書いたけど、なんとか言わなきゃ駄目じゃないか、とけしかけられたせいもあつたんです。そして最後の結論を何としたかという、松本清張さん自身がこんなくたらない間違いをするはずがないと私は思う。だからこれはどなたかが代筆をしたものではありませんか、というふうな手紙を編集部へ出ししました。

ところが井上ひさしさんと違って、とうとう返事は来ませんでした。ただ、いくらかそれを書いた効果があつたかなと思うのは、第二回目のときに、やたらに私の三省堂の『伊能忠敬』という本からの引用が多くなつたんです(笑)。佐原の町にいくら自由の雰囲気があつたと書いてあるのはこの本だけであるとか、忠敬が伊能家に入ったときに没落しかかつているなどというのはおおげさな言い方であるとか、そういうことをこの本はわかりやすく書いている、などということまでやたらに入れてあるんです。だからこれはいくら変な効き目が出ちゃつたなと思つて、あんまりいい気持はしなかつたんですがね。

悪妻伝説

それにしても井上ひさしさんや松本清張さんは、どうも伝説をそのまま事実であるかのごとく小説に書くということがあるようです。この会の機関誌の第八号に私が伊能忠敬の奥さんの手紙を紹介させていただきましたけれども、あの手紙などで見ると、どうも奥さんは悪妻ではないんです。ところがおみちさんという奥さんは家付きの娘でいばっていて、すごい悪妻だったというのが伝説になっています。

たとえば忠敬と向かい合って食事をしていたときに、何が気に入らないのか「あなたは私と一緒にご飯を食べるような立場ではないから、台所へ行って召使と一緒にご飯を食べなさい」と言ったというんです。すると忠敬は「従容自若として……」従容自若といっても今の若い人にはわからないと思いますが、動ずるふうもなく静かに立って台所へ行って召使と一緒にご飯を食べた。伊能忠敬と言う人はそういうふうにに小さなことにはこだわらない大人物であった、ということ**を強調したいわけ**です。そのおかげでおみちさんは悪妻にされてしまいました。息子の伊能景敬もそうです。これは偉人にはつきもので、周りの者を愚か者にしたたり悪者にしたりによって、その人物が偉いことを際立たせるわけです。このおみちさんなどはその被害者です。

しかし、これも本当におみちさんが良妻賢母であったのか悪妻であったのかということは決め手がなかったのですが、伊能家のお蔵を修理するときに多嘉子さんが中をもう一度よく見てくれというので洗いだらい調べたら、おみちさんの手紙が出てきて、その手紙によってよくわかりました。夫思いで、夫を立てて、しかも伊能家の名誉を守ろうという気持が非常に強かった女性であるということがわかると同時に、手紙の中でおみちさんが忠敬に対して、こういうことがあったけれど、あなたは江戸から帰って来たら私を叱らないでくださいよ、とい

うことをやたらに書いているんです。ということは、やたらに忠敬が叱ったということで（笑）、怒りやすかったということは間違いないようです。

それなのに、伝説を使ったほうが小説としてはおもしろいのでしょ。そういうことで伝説がそのまま事実であるかのごとくに小説家によって書かれる。これは大変な問題です。つまり、伝説というのはほうっておけばそのまま忘れられていきますが、高名な小説家が小説に書く事によって、それが事実であるかのごとく再生産されていくのは非常に困ると思います。

おわりに

こんなとりとめの話をしていたらきりがありません。時間でするのでこの辺で締めくくらなければいけないのですが、別に締めくくりの言葉もありません。ただ、これからの忠敬研究ということでは、私が三省堂の『伊能忠敬』を書いたときに非常に痛切に感じたのですが、あんなに小さな本であるのに反響が大きくて、南は鹿児島から北は青森あたりから読んだという手紙がどんどん来ました。そして感想を聞かせてくれるだけではなく、私のところにはこういう資料もありません、などということを書いてくる人があります。伊能忠敬という人は全国を歩いているだけに、伊能忠敬に関心を持っている人が全国に非常に多いのだということを感じました。

そういうときにこの伊能忠敬研究会ができたことによって、資料をお互いに紹介しあうことができるのか、あるいは今まで知らなかった研究を知ることができるのかということはきわめて有意義だと思います。この研究会ができてからまだいくらも経ちませんが、私は研究上ずいぶん得をしたことがあります。

たとえば河崎さんという金沢の高校の先生をしている女性が、この会ができたのをきっかけに佐原へお出になって、私もお目にかかりましたが、この人が加賀藩での忠敬の測量について非常に具体的なことを明らかにしています。大谷さんの本にも忠敬が方々を回ったときに隠密ではないかと疑われたなどということが書いてある部分がありますが、加賀藩では実際に、忠敬から隠密がましき質問があったら答えるな、という藩の命令が出ています。そういう命令が出ているものだから、忠敬がああ通るにはこちらの道を行つたらいいのか、などということも聞いても答えてくれないんです。そんなことがはつきりわかります。そういう点でも忠敬はずいぶん苦労したのでしょう。

しかしそれ以上に私が不思議に思っているに分からないのは、加賀藩へ行く前に糸魚川という所で、相手が非常に不親切な案内しかなかったというので忠敬が叱りつけたことがありました。そのために現地の連中が殿様に言つて、殿様から忠敬がいばつていてということ、を江戸幕府に通報されて非常に困つたことがあります。そういうふうな忠敬は殿しい人で、間違つていてと思うと相手をやつつける。これが忠敬の姿だと思うのですが、加賀藩では忠敬はおとなしくて、相手が説明してくれないと「そうか」ということで行つてしまふんです。これは藩から直接の命令が出ていることを知つていて、あまりとがめだてしなかったのかなとも思います。でも忠敬の気質としてはおとなしすぎる、というような感じもしました。

それからこれは機関誌の八号に安藤由紀子さんが書かれていますけれども、坂部貞兵衛（忠敬が片腕とたのんだ測量のベテラン）が五島の福江島という所で亡くなって向こうに葬られています。五島では伊能測量隊は手分けをして測量したのですが坂部貞兵衛は日ノ島測量中に病氣にかかりました。彼が日ノ島から別の島にいる忠敬に出した手

紙があります。その手紙にはこんなふうに書いてあります。

「この島の宿は大きな家ですが、古い家で先日の大雨で座敷中雨もりがして寝るところにも迷いました。便所は十四、五間もはなれていて高い縁側をやつと下りて通らねばなりません。また、寝床のまわりを数万のアリが行進しています。」こんな所に泊まったのか、と思います。つまり、測量旅行中は忠敬とか坂部貞兵衛などは身分がいいので、床の間付きの部屋に泊まっている、などということがほかの資料にもたくさん出てきます。だからいつでも泊まりはふんわりやつたのだからと思うと、とんでもない話なんですね。坂部貞兵衛ほどの身分のある人が、数万のアリが行列するような所に病中、寝ていなければならなかったのかということも思うと、大変だったのだなと思います。

坂部貞兵衛でさえそうですから、内弟子やもつと下の人たちはどんな思いをしたのだらうと思います。坂部貞兵衛は「いよいよ明日日ノ島出立にあいなり候とまづうれしく存じた」というようなことを言っています。本当にそうだらうと思います。

こういう具体的な資料が全国から発掘されて紹介されるならば、伊能忠敬像はますます豊かになっていくのではないだらうかと思えます。今日ご来場の皆様も、忠敬に関するどんな小さな情報でも結構ですから機関誌へお載せくださるようお願いしたいと思います。ごく小さなことでもそれが大きなものにつながっていく場合がよくあるので、小さなことだからといって軽視することはできません。

ではこれで終わらせていただきます。

人生を貫く紐

伊能敬

先日、小島先生から思いがけないお手紙を頂戴した。先生のご了解を得てその一部を掲載させていただきます。

「大へん遅くなりましたが、故伊能敬先生の絶筆と思われるものをお送りします。一九九五年二月十一日、『伊能忠敬生誕二五〇年』の記念講演を私がさせて頂き、そのあとでパネルディスカッションが行われ、敬先生はパネラーとして出席して下さる予定であったのです。当日の朝、私宛にこの文書をFAXでお送り下さったのですが、講演会でご紹介の機会がなかったことを、今でも心残りに思っております。折をみて『伊能忠敬研究』にのせて頂いてはいかがでしょうか。」

その頃、体調を崩していた兄は、それでも是非佐原まで出向きたいと希望していたが、当日の朝、残念ながら欠席せざるを得ない旨を、小島先生にお伝えし次のメッセージをお送りしたそうである。

小島先生のご厚意と義姉伊能昌子の協力で、兄の最後の文章が日の目を見ることが出来るのを、大変嬉しく思っている。

(伊能 洋)

〔欠席の弁〕

本日は、常日頃「伊能文書」につきご指導頂いている小島先生はじめ、コーディネーター、市長、その他のパネリストの皆様、さらに、生涯教育に熱心な市民の皆様の顔を拝見することができず、誠に残

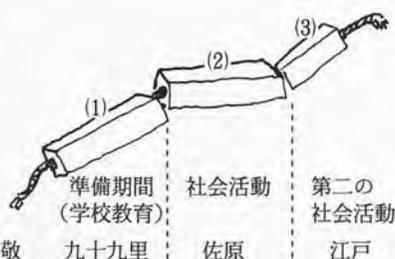
念に存じ、またご迷惑をおかけし、申し訳なく存じます。しかし、突然の高熱に見舞われ、ドクターストップがかかっては如何ともしがたいこと、お許しください。

小島先生は、測量時代の華やかな忠敬(第二の人生)は、佐原時代という第一の人生の必然の産物であると、日頃云われています。そして、それはその通りだと存じます。私は、同じことを一寸趣を変えて表現して見ましよう。

ヨーロッパでは、第三の人生という言い方があるようです。

積木細工でいえば、直方体の積木を任意に

3個ならべ、(1)(2)(3)とします。



第二の社会活動 江戸

社会活動 佐原

準備期間(学校教育) 九十九里 忠敬

(1) は基礎教育
(2) は実社会時代
(3) は、いわゆるその後の人生です。

(1) の九十九里時代の三治郎は伝説にもあるように医師、測量の武士などから知識を得たり、書物を読み漁ったり、時には野外実習を自ら試みたりしたでしょう。

このエネルギーの蓄積が三治郎を「佐原の忠敬」に押し上げたのです。

(2) 「佐原がいかに忠敬をきたえたか」からあとは、小島先生にお任

せして、わたしは三つの『不連続』にみえる積木が、実は芯に太い紐がしっかり通って『連続』になっていた。この貫いた紐が、第三の人生を花開かせたと、申し上げたいのです。

「第一の人生」の頃、私は画が好きで、小学校に入る前からノートは鉛筆画でびっしりでした。中学時代に三里塚の御料牧場の馬をペン画で描いて、夏休みのコンクールに入選したこともありましたが、画才はあきらめて、第二の人生は化学の世界に入りこみました。

しかし気がついてみると、昭和三十年頃の学会では通常、黒一色のまじめな図表を掲示していたのですが、私の図表は五色のカラフルなものでした。

その後、化学映画の製作指導、教育テレビなどを手掛け、生涯教育のメッカ・放送大学の発足時から、客員教授となりました。他大学の学生間でも「伊能の電気紙芝居」と云われていたようですが、映画・ビデオ・OHP、全て私の好きな画とつながっていたのです。

放送大学で、私より年長の学生さんがおられました。化学工場をもっておられるので、もっと幅広く化学の周辺を知りたいとのこと。「第二の人生」と「第三の人生」をつなぐ『紐』が生きていますね。スクーリングの帰途、老いも若きも何人もの学生さんが待っていて下さって、色々語り合いつつ駅に向かう時、これが生涯教育だなあ、としみじみ思いました。

話は飛びますが、忠敬は三人の妻に恵まれ、仕事の協力者としても大きい成果を上げましたが、同時に彼女たちの愛情が、ずいぶん仕事のエネルギーになったのでは、と思われまます。

また、こういう話もあります。八十をこえた老僧が、末期ガンで入院したところ、看護婦に熱烈に恋をし、ガンは消えてしまったといひます。私は修行が足りず、美人の看護婦さんに囲まれていながら、本日は欠席となってしまいました。皆様も生涯青春で、「第一の人生」からの『紐』を生かして、「第三の人生」を楽しんで頂きたいと思ひます。

(伊能家七代目・武蔵大学名誉教授)

津久井縣について

清水 靖夫

先号の「伊能図と官板実測日本地図」で、「官板実測日本地図」上の津久井縣について誤記としたところ、誤記ではないのかと、堀内立三氏から、懇切な御指示をいただいた。地名等の詳細については別に記したいが、「元禄四(二六九)年代官山川金右衛門が愛甲・高座両郡に含まれていた村を分離独立させ全国でも珍しい津久井縣の名称を用いさせた(風土記稿)」
「平凡社日本歴史地名体系」とあって、また「元禄四年代官山川貞清」
「保郷帳／津久井縣(つくいがた)」
「角川日本地名」とある。全国的に珍しい「縣」という名称はここのみという「角川」。津久井縣が津久井郡になるのは明治になってからであった。興味深い呼称であるので、以上訂正と共に、堀内氏に感謝して小文を記す。

一九九七、二

「坂部さん、おつかれさまでした」 安藤 由紀子

三回にわたって坂部貞兵衛の書簡に付き合っていた。この稿を閉じるにあたって、伊能忠敬の書簡・「江戸日記」、高橋景保の書簡・「御用日記」などに見え隠れする短いカットを繋ぎ合わせて、この無名に近い人のイメージをもう少しはっきりさせたいと思う。

御先手同心

いったい坂部氏はどこで生まれ、どの程度の暮らしをしていたのだろうか。五島の福江島にある彼の墓前で「湖月院遼蒼関山一空居士」と彫られた戒名を眺め、湖月院というのだから湖のほとりが生国にちがいないなどと、いろいろに想像してみた。私は生まれて初めて、拓本というものをとりに行ったのである。

同心クラスの資料なんて見付からないだろうと、調べもしないで諦めかけていた所へ、会員の岡本暉子さんから、「江戸幕臣人名事典」のコピーが送られてきた。ところがその坂部姓八名の中に、坂部貞之助という人がいたのである。

「坂部貞之助（さかべ・ていのすけ）」

慶応二年三八才。家禄三〇俵二人扶持。本国生国とも武蔵。拝領屋敷無く、当時駒込片町、御先手下組屋敷内に居住。祖父坂部八百次死去、御先手同心。父岩五郎死去、右に同じ。

安政二年十一月見習い、同四年二月父岩次郎跡御抱替仰付けられ、(中略)元治元年講武所番仰付けられ、当寅年まで十二年間相勤む。

貞兵衛には八百次という長男がいて、測量の跡継ぎになった。坂部家の当主が二〇才前後で長男を得たとすると、貞兵衛↓八百次↓岩五郎↓貞之助と、ぴったり収まってしまう。貞兵衛は御先手同心から天文方へ出向したのであり、「貞」の一字が同じであることからみても、貞之助が曾孫である可能性は極めて高いと思われる。

坂部は測量がなく江戸にいる時も、毎日のように忠敬宅に通って地図作りや星の観測をしていたので、来ない時には忠敬の「江戸日記」にその旨の特記がある。文化四年に「二月二十六日 坂部田舎へ行く。同 二八日 坂部来ル」という記載を見付けた。

彼は三〇俵二人扶持の貧しい同心で、武蔵の国の、江戸から中一日で往復できる小さな湖畔の、月のきれいな所で生まれたのだろうか。

試行錯誤

実際には建てられなかったらしい坂部貞兵衛の碑文の写しが、学士院にある。それによると彼は優れた数学の才能を買われて、寛政年間天文方に出向した。そして文化二年三五才の時、初めて幕府派遣となった第五次から測量に加わった。

全十回のうち第五次は、特筆すべき測量行であった。権力の力をかりて極めて動きやすくなったのだが、初体験につきものの混乱もあった。第一に、ベテランの内弟子たちと不慣れな十分の天文方下役たちの混成隊であったこと。第二に、対外的に格が上がり外部とのやりとりが複雑になったこと。第三に、忠敬氏がたびたび嘆くのを読んで初めて気付いたのだが、日本は西へ行くほど海岸の変化が激しく、関東・東北・北陸を回った経験からたてられた計画がきわめて甘かったことなどである。

文化二年十月十六日に姫路城下から出された景保宛の忠敬書簡を説

むと、「彦根侯からの目録金の件につき、ご注意まことに御尤千万に存じます。かねがねご注意がありましたので、目録のみ受け取り、金子は帰府まで御預けしたいと付添の大西順二郎へ掛合いましたところ、井伊家は外の御大名と違い、御老中でも御辞退はなさらない、受取られる方が宜しいと、しきりに申されますので、坂部氏と相談し「いづれ帰国の上で」とお預かりしたのです。今後このような時はお指図の通りにいたします」とだいぶ叱られたようだ。

結局受け取ってよいことになるのだが、上層部(堀田撰津守と高橋景保)も方針定まらず、忠敬も坂部も振り回されている。

病人も多く、ほとんど予定に遅れるので、手分けのため支隊を作ることになり、初めのうち坂部は隊長を固辞した。「手分けをして坂部氏を隊長にするようにとの仰せ、御尤と存じます。早速相談致しましたが、一同に御証文一枚では長い手分けには不承知で、なにより私と同伴したいと申しております」と忠敬の景保宛書簡にある。

坂部が隊長を断った理由は他にもあった。この最初の幕府派遣隊は、初めからしつくり行かなかった。内弟子と士分の下役の間で、わだかまりがあったというのが通説である。坂部より上席の下役市野金助は、前年八月病気を理由に江戸へ帰ってしまった。具体的にないが、あったか、資料は何も語ってくれない。運の悪いことに、翌年四月末周防の秋穂浦で忠敬が発病した。八月二十日まで四か月近く、測量日記も自筆ではない。この間忠敬ぬきで、赤間関(下関)・萩城下・浜田城下・松江城下・三保関・隠岐島・鳥取城下と測量は進んだ。坂部たち士分の監督は行届かず、内弟子たちが暴走した。帰府後十二月十七日、忠敬と坂部は「差控伺」を出し、「不及差控」の申渡しがあつたが、内弟子たちは、重く処分された。

史料 一

(文化三年十二月十八日条 申渡書の写し)

(学士院写本・伊能忠敬江戸日記)

伊能勘解由
坂部貞兵衛

右西国筋為測量御用、相越候処、下部之者共何も於御用先、所々より料理方鹿末之儀

有之候節は、いかつニ罵之、膳具等相損し、其外

買物等、押て下値ニ買取候儀も有之候由相聞

不埒之至ニ候。依之銘々、永之暇可被申付候。

右の趣、撰津守殿、被仰渡候ニ付、申渡之。

測量隊が結束するには、士分の天文方下役の側にリーダーとしての経験と熟練が必要であり、そのためには、次の第六次以降を待たねばならなかった。

長男八百次

測量隊は文化四年めざらしく一年間江戸において、一年九か月に及ぶ前回分の地図制作に追われ、十二月十八日完成、幕府に上呈した。

史料 二

(学士院写本・伊能忠敬江戸日記)

(文化四年八月十九日条)

十九日 晴天 朝五ツ後、間 五郎兵衛来ル。四ツ前、会田三左衛門来ル。九ツ前、高橋作左衛門、坂部貞兵衛親子来ル。間、会田は五ツ半後白木屋蔵店棧敷へ遣。青木、下河辺、門倉等も同伴。九ツ頃より高橋氏、我等同棧敷へ罷越、一番の練りものより七番迄一覽。

八ツ半頃ニ一同帰ル。此午前、往来過分ニ付、永代橋崩テ、大勢のもの横死ニ及へり。

江戸災害史に名高い、例の富岡八幡祭礼の永代橋崩落事故の時、忠敬はお馴染みの面々をすぐ近くの棧敷に招いて、日頃の細かい仕事の息抜きに、祭りの出し物を見物していた。坂部も、当時十五才くらいで天文方に出入りしていた長男八百次を連れていた。めずらしく楽しそうな情景である。坂部は景保宛の書簡の尚々書きに、いつも家族のことを頼むのを忘れない。「倅八百次いつも御厚論にあずかり、お礼申し上げます。また留守宅も相変わらざご厄介になり…」と。

八百次はこの頃見習いであったが、父の死後天文方下役を命じられ、残りの第九次伊豆・第十次江戸府内の測量に参加して、父の仕事を完成させた。そして文政三年に、三十才前後で亡くなっている。

初めての測量出発後、貞兵衛に最後の女の子が生まれている。この子は父親が死んだ時やっと七才だったわけだ。

身分をこえて

幕府事業になりたての第五次で、初めて御家人を部下にした忠敬は、景保宛の書簡で『坂部氏御内室御安産、母子壯健之段被仰下、於下拙大安堵仕候：』と丁寧な敬語を使っている。途中「増員願」を出す時も候補者について、「槍もち」以上で今連れている下役より上格では、隊員一同『和熟仕兼』と気を使った。

文化七年になると、『坂部へ御伝言被成下、早速申達候』と、身内について書いている調子になり、本誌九号で紹介したように坂部も、言葉こそ丁寧だが断固たる諫めの手紙を忠敬に出すようになる。二人の間には身分を越えた関係が生まれたのだと思う。坂部は測量に、天

体観測に、部下の統率に熟達し、立派に支隊長役を果たした。

同じ頃から天体観測は分業で行われるようになった。「観星鏡」が坂部の担当で、木星とその衛星の蝕現象などを観測した。

薩摩藩は財政難から、種子島・屋久島の測量をなんとか省いてもらおうと懸命で、留守居添役野元嘉三次と測量隊の間で、さまざま交渉があった。坂部は渉外係りとしても忠敬の右腕で、二人連名の資料が多く残されている。

厄年

文化十年は測量隊の厄年で、天文方お役所の全焼、忠敬長男景敬の死、そして坂部貞兵衛の死と災難が続いた。この年四月には、坂部の母も亡くなった。息子に先立つこと三か月である。

文化十年五月四日の忠敬宛高橋景保書簡には、「貞兵衛母近頃次第に老衰、遂に先月十一日病死致しました。年に不足はありませんが、貞兵衛留守中で、このことのみ残念です。十三日に八百次から知らせた筈なので、今頃は届き、さぞ驚いていることでしょう。よくよく慰めてやってください」とある。

なにしろ江戸と九州では、書簡の到着に一か月半から二か月かかるので、こう災難続きでは、情報が絡みあってしまう。

この年六月七日、忠敬の長男が亡くなり（天文方と佐原の間で、忠敬に対しては秘しておくよう申合わせていた）、坂部は七月十五日に亡くなっている。次の書簡は八月十七日の日付なので、忠敬は、息子の死を知らず、坂部の死を知っており、景保はその逆なのである。

史料 三

（伊能忠敬記念館文書）

八四一一九 高橋景保書簡 忠敬宛

（文化十年八月十七日）

『(前略)』

一、先以貞兵衛義、大病之由、病症書面被仰越
 扱々驚入候。只今、七月十四日付之御状、
 五嶋弾正殿留守居、佐藤与右衛門罷越
 対面致度旨ニ付、逢候處、弾正殿甚以
 心配被致、加治祈祷など、無怠被致候由、
 親切成ル義ニて候。右之者、委細容躰申聞候。
 承之候處、十が九ハ六ヶ敷由、十四日付御状後
 今日迄、已ニ三十余日ニ相成候間、其後ハ
 如何候哉。得幸候て、治療届キ候ひしヤ
 無覚束奉存候。自然漸快ニも候ハ、下役
 中之内耆人、御差添置可被成候。遠路之義
 故、甚以、無覚束候。同人倅八百次義も承之
 甚驚人、心痛候由、尤ニて候。被仰越候様ニ
 候得は、今比ハ最早致遠行候哉。同人義も
 平生健氣之様ニ、相見候得共、裏ニ虚弱
 之處有之候哉、先年も両度、大病相煩候。
 且数年、水土の替り候所、又ハ山海の悪氣
 を受居候處、先達て、母遠行之義承り、
 心中煩候處へ、右悪鬼、忍入候義と被存候。
 被仰越候病症之様子ニてハ、疫痢とも可
 申哉。瀉利有之候ハ、先ハ類ニて候。何卒
 順快ニ趣候様、祈候義ニて候。○若万一之義
 遠行候ハ、如仰、先年伺済之通り、御取斗
 可被成。扱も、苦々敷事ニて候

『(後略)』

「一、まず以て貞兵衛大病の由病状ご報告の書状受取り、大変驚き

ました。ただ今七月十四日付の御書状を持って、五嶋家お留守居役佐藤与右衛門来訪、対面したいとのお会いしましたところ、五嶋侯は大層ご心配なされ、加持祈祷など怠りなく行ってくださった由、ご親切なことです。留守居役から詳しい容体を聞きました。話によれば、十のうち九は難しいそうで、十四日付の書状後今日まで既に三十日以上たっておりませんが、その後はいかがでしょうか。幸運にも治療の効果があつたのでしょうか、心配です。もし少しずつでも快復の様子ならば、下役のうち一人付き添わせておいてください。遠方のことで、当方ではどうしようもありません。

倅の八百次も大変驚き、心を痛めている様子、もっとものことです。お手紙の通りならば、今頃はもうこの世には居ないのかも知れませんが、同人も普段元氣そうに見えますが、虚弱な面もあり、今までに二度大病をわずらいました。その上ここ数年、水や土の変わつた所を旅し、山海の悪氣を受けており、先日母の死去を聞いて心が弱っているところへ、右の悪鬼が忍び込んだのだと思われまます。お手紙の病状だと、疫痢かも知れませんが、下痢がひどければ、まずこの類です。なんとか快復するよう祈っています。

○もし万一死亡の時は、仰せのように、先年伺済みのきまりに従つて(死亡の時は現地で埋葬すること)取り計らってください。本当に悲しいことです。」

五嶋藩は出来るだけのことをした。はじめ酒屋富田屋で預かっていた坂部を武家屋敷の中の貞方家へ移し、藩医や使者を差し向け、危篤となつてからは、藩主の名代として、家老坪内直記を見舞いに遣わした。藩の出費もかさんだらしい。「七月九日、町奉行平田兎毛を呼び、測量方滞留、殊に坂部貞兵衛病氣に付き、乙名ばかりでは市中物入り

も多く難波のようであるから、犬ノ馬場あたりへ出向き諸費用申し出させて届けるよう申し付けた」「十五日夕八ツ時、伊能勘解由その他付き添いの上病死の届けに来たので、見廻りとして町奉行を遣わし、埋葬の件は宗念寺に申し付けた」と『五島編年史』にある。

墓は、世話になった貞方家の墓域にある。

残されたお金

さて、次に紹介する忠敬の書簡は、長男八百次のその後について新しい事実を私たちに教える。

文化十二年五月二〇日、娘妙薫宛の書簡に次のようなくだりがある。「去年帰府後迄は私にも所持金があり、酒造金にも、貸付け金にも用立てましたが、今春からは公儀からの地図仕立て金だけの収入で、時々不足し、紙新かみあらから一時借りて間に合わせています。今後も貸金どころではありません。それよりも、坂部の預かり金百六、七十兩のことで、津宮加納屋治兵衛や久保木への貸金を取揃え、その他は本家の店賃などで取揃えて、返してやりたいのです。」

察するところ八百次は、父貞兵衛から百六、七十兩もの大金を相続し、忠敬に預けて増やしてもらっていたらしい。測量中に各藩は隊員に対し、身分に応じてかなりの金品を見舞いとして贈っている。品物は現金に換えて持って帰り、景保に申告したらしい。第五次の時の景保の御用日記によれば、「右受納致さすべきや否や、昨日撰津守殿へ伺い、受納致さすべき旨、今朝御同人より仰せ渡さる。」とあって、これは、トップから認められたことではあった。坂部の場合は職務上の死として、弔意金も支払われたかもしれない。

いずれにせよ坂部貞兵衛が身体を張って作ったこの大金は、どうなってしまったのだろう。八百次は忠敬に家を建てたいと漏らしていた。

幕末、貞之助氏は拝領屋敷もなく相変わらずの同心暮らしであった。

宗念寺

宗念寺は、福江川に向かって舌状にせり出した小高い台地の上にある。坂部貞兵衛の墓は、まだ字の彫りも深く風格があり、正面に戒名右側に、「文化十年癸酉七月十五日」「俗名坂部貞兵衛惟道」と二行に彫られただけのシンブルなものだった。碑文は用意されていたのだが、福江では碑があったという言い伝えはないそうである。

五島文化協会の野さんのご案内で訪れた時は五月で、白いタンポポが墓前にたくさん咲いていた。西日本に多い日本タンポポで、五島にも最近少なくなった由。野さんは庭で育てて増やそうとしておられ、「坂部さんのおかげでたくさん見付けた。後で掘りにこよう」とおっしゃった。通りかかった中年の女性は、「えらい人のお墓らしくて、時々人が見えます。私も通りかかるとお花をあげます」といわれた。お墓参りの趣味は私にはないが、「坂部さん、おつかれさまでした」と言いたくなってしまった。「了」

【参考資料】

- * 『江戸幕臣人名事典 一』 (新人物往来社)
- * 「伊能忠敬江戸日記」・「伊能忠敬関係雜綴」 (学士院写本)
- * 「伊能忠敬御用書簡集」 (学士院写本)
- * 高橋景保書簡(伊能忠敬記念館文書 84-2-3・84-1-9)
- * 『五島編年史』 (国書刊行会)
- * 『伊能忠敬書状』 (千葉県史料・近世編)
- * 高橋景保御用日記(伊能忠敬記念館文書 H-11)

伊能家文書紹介 (書類) 三

源空寺墓碑建立始末 その二

伊能 陽子

史料

A一四七一一 (世田谷伊能家文書)

御組

伊能勘解由

右勘解由儀、久々病氣之処、養生

不相叶、今四日未之中刻、死去仕候。

依之、此段、御届申上候。以上

巳九月四日

伊能勘解由孫

下総国香取郡佐原村

長百姓

伊能三郎右衛門

印

伊能勘解由由緒

大御番安藤出雲之守同心

天文方高橋作左衛門手付

測量御用下役

下河辺政五郎

印

史料

A一四七一二 (世田谷伊能家文書)

一、祖父 伊能勘解由

右、祖父勘解由儀、久々病氣之処、養生

不相叶、今四日未之中刻死去仕候。依之

定式之忌服、請申候。

忌三十日

巳九月四日より

同十月三日迄

服百五十日

巳九月四日より

来午正月中途

右之通御座候。此段御届申上候。尤、忌

明之節、猶又御届可申上候。以上

巳九月四日

伊能三郎右衛門

忠敬が亡くなってから四年後に病死届が出

され、忠誨は喪に服す。この忌三十日、服百

五十日は「服忌令」の祖父母の場合にそった

もので、父母の場合は忌五十日、服一三月

(閏月をかぞえず)であった。

※「文化元年再刻・御改服忌令」による。

書類上でのもう一つの命日が、死亡時刻ま

できちんと書かれている。

この時の当主、三郎右衛門は忠誨。彼は、

祖父忠敬の亡くなった三ヵ月後に母をしくし、

伯母妙薫(忠敬の娘いね)と共に地図完成に

力を尽くしていた。その伯母も翌文政五年に

失うことになり、八才で父を亡くし、次々と

頼るべき人を失った、元服をすませたばかり

の当主の、肩の重荷はいかばかりであったらう。

それにしても、源空寺墓参のたびに私たち

は、忠敬の墓石が高橋先生のそれよりも大き

いことが不思議であった。十九才も年下の先

生をあれほど尊敬し、師亡き後は測量先から

遙拝していたと伝えられるほど慕っていた忠

敬の、意に反しているように思えたのである。

しかし、次の書き付けにその手掛かりを見

つけたような気がした。

史料

D一五四 (世田谷伊能家文書)

覚

一、御石碑

一基

御石塔長サ三尺四寸尤頭(圭形)並ニ尾入共

幅壹尺六寸角

台石大サ式尺四寸四方

高サ壹尺式寸五分

下台四枚ニて合石大サ三尺ニ高サ壹尺

地形捨三枚土中エ埋石は長サ四尺巾壹尺

式寸厚サ六寸之石ニて仕

右出来上り浅草源空寺様迄持込ミ地形

突堅メ居付建方共

石代運賃車力石工手間諸色共一式

代金八両壹分ト銀式角

石碑正面大宇八ツ 壹字ニ付四奴ツ、

代金式分ト式角

伊能勘解由

右勘解由儀久病卒... 不在叶今日未... 伊能勘解由

乙九月信

伊能勘解由... 大河... 伊能勘解由

一祖父

伊能勘解由

石祖父勘解由儀久病卒... 石相叶今日未...

史式... 系服清

乙九月信

乙九月信

石... 浦野... 伊能勘解由

乙九月信

伊能勘解由

一市

浦野... 伊能勘解由... 浦野

右通隨分入念仕立差上可申候以上

高橋

一

浦野... 伊能勘解由... 浦野

浦野

碑文数九百六拾壹字 壹字二付五分宛

右之通隨分入念仕立差上可申候以上

文政六年未正月廿五日

いつミヤ

喜右衛門

高橋

史料

A一四九 (世田谷伊能家文書)

覚

一、金拾六兩三分式朱卜

錢貳百五文

右は

伊能先生御墓碑

一式代金之

内金拾七兩也

右之通髓ニ奉請取候

つり錢之儀私方へ

御預り申上候以上

いつミヤ

喜右衛門

浦野

印

高橋、浦野、浦野... 浦野

浦野徳之助と思われる。忠敬没後は、前号で

紹介した諸書類の指示と同様、景保中心の天

文方が、墓の建立についても全面的に面倒を

みていたことがうかがえる。実際の費用はど

こから出たかわからないが、石屋への注文、支払いなどに伊能三郎右衛門の名はない。

墓石に刻まれた碑文は、大学頭・林述斎の第一の門人、佐藤一斎の作である。文字は、関研(関 藍梁)の書。このような豪華版の墓石は、景保の深い思い入れがなければ、できないことではないだろうか。

全国測量の総指揮者として、忠敬の成し遂げた仕事に対する大きな評価、そして親とも慕っていた忠敬への気持ちが進められているのではないかと思われる。

そして、墓石正面の「東河伊能先生之墓」の文字を改めて眺め、大いに納得したのである。

さて私が、今回とても頭を悩ませたのは、貨幣の換算である。複雑な江戸時代の貨幣単位はなかなか理解できない。特に文政元年からの二十二年間は貨幣相場が混乱していたように、金、銀、銭さえよくわからない私は、まったくお手上げである。まして現在の金銭感覚と比較するには、米とか人件費(手間賃)などを基準にするわけにはいかないと考えたが、一応「一両が十五万円」と単純に考えてみた。

石屋に渡したのは二百五十五万円。正面の大きな八文字は、一つ約一万五千元、合計八万四千元。墓石の左右後ろの九百六十一文字は、千二百四十五円宛として約百二十万円となる。碑文の刻み賃、計約百二十八万四千元である。石代そのほか手間賃などがおよそ同

額の約百二十四万五千元である。

もちろん佐藤一斎、関研への謝礼はまた別であろうから、当時としても、かなり費用をかけたお墓なのだと思う。

ちなみに当時の職人が月平均二両の収入で、妻子を養い中流(?)の生活が出来たという。二八そばが十六文で四百円、銭湯は大人六文、子供四文、百五十円と百円ほどであろうか。

浅草源空寺の墓地に足を踏み入れると、すぐ目の前に高橋景保の墓がある。私が初めてそれを知ったときは、横文字が刻まれている碑が大きくひび割れて、寒々としていた。シールで補ったという印象があったからである。死亡当時は墓碑の建立も許されず、この顕彰碑は昭和十年に建てられたもの。私が源空寺に通いだしてから三十余年が経ち、私の中の景保像も、いろいろと変化していった。

ともあれ、次の源空寺参りのときは景保さんのお墓に、いろいろお世話になりましたと、特に丁寧に御挨拶したいと思っている。

またその並びには、幡随院長兵衛夫妻、谷文晁夫妻が眠っており、それぞれの波乱に満ちた生涯を偲んでお参りに来る人もある。

のぞみ通り高橋先生の隣に葬られ、立派なお墓の下で恐縮しながら、尽きることはない師弟の語らいを楽しむ、嬉しそうな忠敬先生の姿が目に見えようである。



伊能測量の地域史料

滋賀県日野町松尾地区に残る伊能隊の先触れ、泊まり触れなどの写し

香取 禧 良

滋賀県日野町に松尾という地区がある。伊能測量隊は九州第一次測量に向かう途中、文化六年十一月一日にここを通過して隣の鎌掛村に一泊した。

この文書は、武佐宿から継ぎ送られてきたもので、先触れと測量の支援に必要な人足数などの参考事項を記入した文書および測量隊に提出した書き上げの控えから成っている。日野町大字松尾二区の有で、現在は総代の大沢千代三氏が保管している。伊能隊の測量に關する形の整った記録の一つとして、大沢氏の御承認をえて掲載させていだいた。

日野町は、伊勢參宮のあと、多賀大社に詣るため、東海道土山宿から中山道愛知川宿に至る御代參街道の宿場であった。

伊能隊は、逆向きに愛知川から武佐宿(近江八幡市)まできてから中山道を離れ、岡本(蒲生町)に泊まり、日野を通過して、鎌掛(現在は日野町)に一泊して東海道の土山に出た。

土山から先は測量しないで通過している。なぜ、九州に向かう測量の途中で、主要でないこの街道だけを測ったのかわからないが、おそらく、中山道と東海道の間を結ぶ街道を測って、すでに測量されている両街道の關係位置を確認したものとおもわれる。

先払いに、箒持ちはよく出てくるが、篩持ちは珍しい。見盤は小方位盤で、台持ちと見盤持ちが別れている。見盤は正副の二本一組であった。忠敬と副隊長の坂部は

いつでも乗れるよう駕籠がついていた。

箒持ちは、データの記録票を集める役。坂部組には、床机持ち、煙草盆持ち、絵図持ちがいない。忠敬と少し待遇に差があったようである。

人足割付けは、村相互の心得触れのようなものであろう。

(編集部)

史料一

文化六年十月

天文方測量御用御先触^{並ニ}

御(証)文三通之写

武佐宿^〆至來候人馬割附之写

松尾町

国々測量為御用武佐宿^〆八日市

場夫^〆伊勢街道日野仁正寺通り土山宿迄致通行候間御證文之通書面之人馬無遲滞繼立旦止宿等差支無之様取計可被申候

一右通行筋村々^〆別紙案文之通書附相認メ前 泊りへ持參可有之候一泊宿之儀雨天之外逗留有之候に付追々可相 達候得共先荒増申達候廿九日岡本泊り夫^〆 日野泊り土山泊りと相或可申候間其旨相心得可被申候此触早々順達土山宿ニ留置我等 共差之節可相通候以上

十月廿五日

測量方□

武佐宿^〆

八日市場

伊勢街道

日野

仁正寺通り

土山迄

右村々

宿々

問屋

年寄 中

名主

組頭

御證文之写 三通

人足老人馬六疋從江戸中山道
木曾街道筋赤間関豊前豊後日向大
隅薩摩肥後海辺廻浦並同所嶋々石
見尾張三河甲州街道往返とも測量
御用付天文方高橋作左衛門手附伊
能勘解由同手伝勤方坂部貞兵衛同
下役下河辺政五郎青木勝次郎永井
要助罷被越候老人貳疋勘解由壹疋
宛貞兵衛政五郎勝次郎要助江相渡
候者也

文化六巳

八月 備前印

右 村宿 中

覚

一人足 七人
一馬 壹疋
一長持 壹棹
右者測量為御用測量類從江戸中
山道木曾街道筋山城淀より西国街
道赤間関豊前豊後日向大隅薩摩肥
後海辺廻浦並同所嶋々石見尾張三
河甲州街道往返共伊能勘解由断次
才御用中幾度茂可持送者也

巳八月 備前印

右村宿中

伊能勘ヶ由儀為測量御用中山道
木曾街道筋山城淀より西国街道赤
間関豊前豊後日向大隅薩摩肥後海
辺廻浦並同所嶋々石見尾張三河甲
州街道往返共於途中茂測量可致旨
其先々二而差支無之様致尤地
方通行難儀所ハ其所より船を出し
案内致無差支様可致者也

文化六巳

八月 備前印

宿々村々年寄共

武佐宿より申参候人馬割付之写

御先番

一坂部貞兵衛様

先拂 貳人 節持老人

羽織脇差三而 貳人旅人笠等とらせ

帯刀之方者公儀天文方と断

一梵天持 羽織計六人

一間繩持 五人

一間竿持 老人

一見盤持 貳人

台老本づつ

一繩持 老人

一見盤貳つ 老人

貳本一所ニ持御用之節ハ任差図

一台持 老人

一御乗物一挺 四人

〇持壹荷 貳人

御弁当持 三人

一跡改役人 老人

一帳付役人 貳人

羽織脇差二而 梵天側二居

差図帳面間数を認役

一驚持

同断間敷札請取驚へ差上役

一先達と出役弁当廿八人分三人

御跡改

一伊能勘ヶ由様

先拂 貳人

〃 〃 老人

前之通役 七人

一梵天持 前之通役

一間繩持 拾人

一間竿持 老人

一見盤持 貳人

前之通役

前之通役

前之通役

一見盤持 老人 同断

一御絵図持 老人 羽織脇差

一四方儀一頁 老人

一烟草盆持 老人

一床机持 老人

一御乗物 四人

〇持 貳人

台持 老人

辨当持 三人

跡役人 老人

跡立弁当持 三人

是者宿々宿迄持送り

一御長持 壹棹 人員八人

先拂 老人

一見送り戈領 老人

一前御泊り江御機嫌窺役 貳人

十月廿六日

右之通御用意可被成候以上

武佐宿 役人中

八日市右

土山迄

御役人中

文化六年

天文方測量御用書上帳

近江国蒲生郡日野 松尾町

已十月

小笠原佐渡守領分

瀧川安藝之守知行所

近江国蒲生郡日野 松尾町

一高六百五拾九石老斗三升四合

内百八拾老石六斗五升八合八夕

小笠原佐渡守領分

四百七拾七石四斗七升五合貳夕

瀧川安藝之守知行所

一家数百三拾九軒

内三拾四軒 小笠原佐渡守領分

百五軒 瀧川安藝之守知行所

外に枝郷無御座候

一町長 東西凡五丁 南北凡五丁

町並に御座候間野間無御座候

一町内通り筋 凡五丁

西者上野田村境方東ハ大窪町境迄

一町内街道方申而者無御座候得

共当所与里 同郡仁正寺市橋下

総守殿御屋敷へ貳拾丁 同郡大

森村最上監物殿御屋敷へ三里

同郡村井町綿向社^江 貳十丁

一居町往還^一無御座候間勿論^立立場^場

無御座候

但シ東海道水口宿方 貳里半

同 土山宿方 三里

中山道越川宿方 六里

一当町隣村

南ハ野田村家居迄凡貳丁余

田畑続ニ御座候

北ハ松尾山村家居迄凡八丁田畑続

ニ御座候

東ハ大窪町家居当町ニ相統居候

西ハ上野田村家居当町ニ相統居候

一河舟渡步行渡橋等無御座候

一御朱印地之寺社無御座候

一寺 一ヶ寺

浄土真宗西本願寺末本誓寺

是ハ小笠原佐渡守領分ニ御座候

一社無御座候

一名所旧跡名産之類無御座候

一古城跡無御座候

一遠山見渡

綿向嶽 貳里半

龍王嶽 貳里

石籠山 一里

三上山 五里

野寺山 一里半余

右之通相違無御座候 以上

文化六年

已十月

小笠原佐渡守領分

松尾町

庄屋 源助

年寄 文右衛門

瀧川安藝守知行所

同町

庄屋 善右衛門

年寄 重兵衛

講座 「新しい伊能忠敬像を探る」

TAMA市民塾（多摩交流センタ）で標題のような講座が開かれることになりました。四月から月一回、講師は、武田、渡辺、伊能、安藤の各氏（代表・武田威）で、すべて本会会員です。受講者は三八名で、すでに定員を超過して締め切りました。各地で、忠敬に関する催しが増えそうな成り行きで、よいことだと思っております。

（編集部）



◇連載

第六次測量日記 (四)

土佐の高岡・幡多郡界から伊豫の国境まで

佐久間 達夫

同二十五日 前夜より雨。五ツ後に止。五ツ半頃より鈴浦出立。手分先手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、鈴浦(鈴村もあり)下より初(般野浦)というなり。家二軒なり。古は一浦にて家数もありよし。今は伊与木郷の内になり。浦もなしといふ。佐賀浦迄測、それより鹿嶋一周を測。後手は坂部、柴山、文助、善八乗船して二十三日測留の与津浦字水谷より測初、風谷を歴て此所(高岡郡与津浦、幡多郡鈴浦界)より鈴浦下迄測、先手の初測へ合す。両手共七ツ頃佐賀浦着。本陣大庄屋森佐十郎、別宿庄屋克治、此日伊田上川口浮津入野四ヶ浦庄屋安光慶八、伊田白浜、有井、川上、川口四ヶ村庄屋小野半左衛門出。此夜宵碇で測量。無程曇る。此日郡方下役北岡十右衛門、普請方下役広井小左衛門、同 奥宮弁蔵、郷方横目根采録八、同 植田多郎平、高知へ引取。

同二十六日 朝曇天。六ツ半頃 佐賀浦出立。手分、先手坂部、柴山、文助、善八、伊田浦枝郷白浜(家十一軒あり)より初、伊田浦(同村あり)、有井川村(地先なり。家は三四町奥にあり)、上川口浦まで測、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、佐賀浦下より初、白浜迄測。先手の残杭へ合し、それより山越をなし、伊田浦の松山寺へ立寄、中食をなし、此寺由来の紀實之の月ノ字の額一葉す。日野前大納言買波御の添主(シヅメ)の歌あり。世に遠く、あるかなへかの影とめて、つき

越かたみの水くきのあと。曹添の書に紀實之朝臣は、土佐の任はてて郡に傳りのほらせ給うころ、海より月の出るを見て、「郡にて屋崎のはに見し月なれど、浪より出て、浪にこそいれ」といえる歌等を証とせり。それより乗船して上川口浦へ九ツ後に着。止宿本陣石見屋多三郎。脇宿糍屋治七、善後伊与木郷大庄屋間崎源左衛門、入野郷大庄屋永野浅六、田野浦(同村)庄屋彦進、具同村大庄屋小野庄之丞、伊田上川口 浮津 入野、四ヶ浦大庄屋安光慶八出る。此日、伊予国宇和郡吉田伊達、若狭守(高三万石) 領内河内村庄屋山下源治郎、同領二及浦庄屋世田仁左衛門、当国迄測量御用向見聞に来る。

同二十七日 朝曇天。六ツ半頃 上川口浦出立。坂部、下河辺、青木三人直に田野浦に至て地図を成。我等、柴山、稻生、文助、佐助、上川口浦より初、枝 浮津浦を測、入野村枝郷(多)村、入野村、上川口浦枝浦入野浦を過、入野郷田野浦村、下田浦枝浦田野浦迄測る。九ツ前田野浦着。(本陣、蓬来山和泉寺 真言宗、飯亭主 庄屋喜代平) 脇宿、田野郷浦庄屋彦之進、七ツ後布屋庄屋友右衛門。(布村 立石村) 庄屋沖幾之丞出る。下茅浦大庄屋岡村益平来る。

同二十八日 前夜より大雨。同所逗留。午後伊与木郷大庄屋 間崎源左衛門出る。国境迄付添案内のよし。具同村大庄屋庄之丞出る。浦方下役宮崎竹助、幡多郡

郡方下役秋尾九郎内見舞に出る。此日終日雨。

同二十九日 朝大曇。見合。五ツ前出立。手分、先手坂部、青木、文助、善八、鍋嶋村の内平野(家三十軒あり)より初、下田浦止宿下迄測。後手我等、柴山、下河辺、稻生、佐助、田野浦より初、出口村、伊屋村(二ヶ村共に入野郷枝村)を過て鍋嶋村枝郷平野迄測先手の初杭へ合測。それより本道無測量にて下田浦へ行、同所止宿にて中食し、それより同浦川口向(四万十川)という。当国の大河、又渡川という。幅二三町、間崎村枝郷名鹿地ノトウ崎より初、同村枝郷初崎界より險山を横切海に付て山上を測、名鹿の内字小名鹿迄測、先手も亦下田浦止宿下より初、中嶋、小嶋、大嶋を越(下田村持)間崎村枝郷初崎まで測。後手の残杭トウ崎にて合測す。両手共八ツ後に下田浦へ着。(此浦の上にて下田村もあり) 止宿、本陣 平田屋忠藏、脇宿 庄屋麻田源左衛門(親いわく浦之丞)、実崎村庄屋忠太右衛門(当国界迄案内) 布村庄屋沖市左衛門出る。具同村大庄屋小野庄之丞当国界迄付添案内の所、足病にて相止になる。間崎村庄屋安崎為七、国界迄付添に成。間崎源左衛門、実崎村庄屋忠太右衛門は、前より国界迄案内に極る。此日七ツ頃より雨夜に至。此下田浦は川渡なり。(即渡川、又四万十川という)。

同三十日 朝晴曇。六ツ半頃下田浦出立。手分、先手坂部、柴山、文助、善八布浦字狩津より初、布浦を過て下茅浦迄測。それより同浦字鍵掛辻仕越を測後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助昨日測留間崎村枝郷名鹿字小名鹿より初、大名鹿(海辺より八九丁上に布浦枝郷に立石村あり。赤水図の布立石なり)

を歴て布浦字狩津迄測、先手の測へ合す。それより乗船七ツ頃下茅浦へ着。先手は八ツ頃に着。止宿 本陣 大庄屋岡村益半、脇宿船屋嘉兵衛。当浦は能漢なり。着後秋尾九郎内、宮崎竹助、浦方横目、山改役等出る。国界迄付添の間崎源左衛門、忠太右衛門等日々差添着後日々出。以下略。此日宵曇。五ツ頃前より晴る。測量。

六月朔日 朝より晴天。六ツ半頃 下茅浦出立。手分、先手坂部、柴山、文助、善八、大岐村下浜より初以布利浦（同村方もあり）を過て（清水浦より横切の印を松へ残し置）、窪津浦迄測。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、下茅浦字鎌掛よりはじめ、大岐村枝郷久百村を過て、大岐村下浜迄測て先手の初へ合測す。後手先手共 九ツ頃窪津浦着。止宿 本陣 真言宗海蔵院、脇宿 百姓 仁兵衛。此夜中晴測量。（南北の差大 十四五分となる）清水浦庄屋浜田乙治郎、大岐村庄屋 秀平出る。

同二日 中晴。先手は六ツ後 後手六ツ半頃窪津浦出立。後手は同浦下より初、同枝大谷村迄測、（後手は我等、下河辺、青木、稻生、佐助、先手は坂部、柴山、文助、大谷村より初、伊佐浦の字赤バへを過て伊佐浦の足宿山の門前まで測る。足宿山普陀院、金剛福寺という因印白石なり）又窪 陀山という。四国三十八番の札所なり。脇房三ヶ寺あり。嘉宝坊 蓮華院薩藏坊という。止宿 本陣 嘉宝坊 脇宿薩藏坊也。両手共午前に着。此夜晴天測量。

同三日 朝大曇天。六ツ後足宿山止宿坊出立。手分、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、足宿山

止宿前より初、伊佐浦、松尾浦（同村もあり）迄測る。朝出より微雨小雨。松尾浦の前より中雨。松尾浦中食（宿 升屋利八 家作も可なり）にて見合居る。小雨になる。よつて大雨測量難成迄測として中食後、同所より同村字ウスバへ迄測て、先手の測初へ合す。それより乗船（又 大風雨になる）八ツ半頃清水浦へ着。先手坂部、柴山、文助、佐助松尾浦字ウスバへより初、同浦字弘川迄測て中食、雨降る。よつて止て乗船、九ツ半頃に清水浦（上渡なり。深八間）へ着。止宿 本陣 庄屋浜田乙治郎（飯の亭主 大黒屋市右衛門）、脇宿 大黒屋貞右衛門、着後益降る。当郡付添案内間崎村庄屋安岡為七、伊佐松尾両浦庄屋 幸治郎出る。此夜も雨。

同四日 朝より晴天。同所逗留。手分の測、我等、下河辺、青木、稻生、佐助、清水浦止宿下より測、同浦字赤木浜迄測、それより山越横切以布利浦迄測、朝日の先手残印松へ繋ぎ、それより引返し赤木浜より初（鹿嶋の周回を測）字清水浜にて別手の残杭へ合す。坂部、柴山、文助、善八、清水浜より測初、中浜浦、大浜浦へ逆測。昨日測留松尾浦の内字弘川迄測、それより乗船、清水浜にて両手出合、一同蔵掛山へ登て山心を測、共に八ツ半後停宿。此日終日晴天。此夜亦晴て測量。案内当郡付添間崎源左衛門、安岡為七、忠太右衛門三人、浜田乙治郎其外村役人、浦方下役宮崎竹助、浦方横目岡本忠治郎、広瀬龜八（右三人は）当国人口より付添なり）、郡方下役秋尾九郎内、普請方下役生原弥五右衛門、森本喜之助、山改方池田利作両手へ日々付添。（以下は略）。

同五日 朝中晴（日出前赤し）、六ツ半頃、清水浦出立。手分、先手坂部、柴山、文助、善八、越浦枝郷養老浦より初、益野浦（即 三崎浦枝浦）を歴て三崎浦迄測九ツ頃着。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、清水浦止宿下より初、越浦迄測（此所に於て、又小手分越浦より逆に清水浦塩浜迄横切、それより昨日の赤木浜より以布利浜横切へ繋ぎ、それより同浦枝郷養老浦にて先手の初杭へ合測。それより乗船八ツ半頃三崎浦へ着。止宿三崎浦庄屋代中村伝五右衛門、脇宿医館泥谷孝達、両手共に着後、同浦字当麻の下、即 下川口浦の龍串の浜の景色異石を一覽す。三崎郷庄屋矢野川虎藏、清水浦庄屋浜田乙治郎案内。

同六日 前夜より雨。同所逗留。四ツ半頃、我等、柴山、文助、佐助、当浦下より測初、千尋山の岬を回三崎浦下川口浦の界あり。界を越て下川口浦地内に窪浦という人家なしの淺あり。深六七尋、大船二十艘掛り居るといふ。それより三崎浦持の字当麻人家、即 下川口浦地内迄測。

同七日 朝より晴天。六ツ半頃 三崎浦出立。（我等、下河辺、稻生三人は、下川口浦止宿へ先行、地図を調、青木乗船海岸を函す。坂部、柴山、文助、善八、一手にて同浦下より初、同村字当麻より下川口浦持海岸字龍串迄横切、それより龍串移浜を歴（弁天崎一周を測）三崎浦枝爪白（人家あり）を過て四ツ頃下川口浦へ着。止宿 本陣 升屋龜之助、別宿 庄屋佐井弥四郎、下川口村庄屋宮崎順藏、伊佐松尾郷庄屋幸治郎、清水浦庄屋浜田乙治郎、其外村役人案内（界迄付添役人、村役人は略）、此夜晴天測量。

同八日 朝晴天。六ツ半頃 下川口浦出立。手分、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、同村下より初、向村枝郷片粕村(家二軒)を歴て、具ノ川浦迄測、先手の初へ合測。それより乗船四ツ頃に大津浦へ着。本陣 大津郷浦庄屋代上岡弁之丞、飯亭主儀 墨鉄之丞、別宿粟津屋直兵衛、磨局より高知届用状(五月十五日相読)七ツ頃に届。先手坂部、柴山、文助、善八具ノ川浦より初、大津浦を歴て(小才角浦前に小才角村あり)、小才角浦迄測て此浦に急止宿。九ツ頃に着。川内民之丞、即 庄屋なり。

同九日 朝曇天。後手は六ツ頃大津浦出立。乗船、直に小才角浦に至て測初、尾浦を過て同浦字村ノ川にて先手測初へ合す。それより大嶋半周を測、先手坂部、柴山、文助、善八、六ツ頃小才角浦を出立。乗船村ノ川より初、西泊浦迄測、両手共九ツ後西泊浦へ着。本陣 新屋伝右衛門、脇宿新屋千三郎。九ツ半頃より雨。伊予宇和嶋郷目付二宮長太夫測儀御用向見聞に来る。

同十日 朝大曇天。六ツ半前後 西泊浦出立。手分、後手我等、下河辺、青木、佐助、稻生病氣、止宿下より初、^{カシノ}浦、周防形浦(中濃なり)を歴て古満目浦字院具迄測、先手坂部、柴山、文助、善八、古満目浦字院具より初、古満目浦迄測、四ツ後に済。後手九ツ後に着。古満目浦止宿 本陣 庄屋儀助、脇宿年寄伴五右衛門。此夜晴天測量、養連村庄屋岡本半内出る。此浦能楽なり。然し当國の端なれば通船も少、又川もなく在とも遺憾れば、新等も不出。繁昌も少し。清水浦庄屋浜田乙治郎帰村す。

同十一日 朝曇天。先後手共六ツ後古満目浦(旧いわく、古間目浦)出立。先手坂部、青木、文助、善八、古満目浦より初(海岸絶壁難測量、海辺際山道新道(池辺は不残、古満目浦分)を経て平山村(頭栗村塔^塔)、一切村(此村家六七軒にて村浦ともにあり)境字儀津峠迄測、八ツ半頃に柏嶋浦へ着。先手我等、下河辺、庄作、手伝佐助、右平山村、一切村界より測初(後手同様、海岸絶壁難所、山坂本道を(一切村、柏嶋浦境に印杭を残し)柏嶋浦迄測、八ツ頃に同村着。止宿 本陣 真言宗広布山法蓮寺。別宿升田屋又太郎。此夜測量。柴山、稻生病氣。(此日、古満目浦より測、後手の測所は悉海辺、古満目浦分、先手測儀津峠より下の海辺も大概古満目浦分 本道より柏嶋浦へ渡り口より逆に岬を回、渡口より大凡にて十二町程外海柏嶋分にて、余は古満目の海と柏嶋庄屋い)

同十二日 朝中晴。六ツ後 柏嶋浦一同乗船。(柴山病氣に付、柏嶋浦へ残し置。佐右衛門は長持其外荷物残に付差置)三里沖嶋へ渡海。当嶋は土州高知領 予州宇和島領界なり。即 界の下乗(即大石)五ツ半頃に着。領界へ宇和嶋出役 郡方横田儀兵衛、同森文右衛門、郷目付今田善右衛門付添案内。正木村庄屋殿岡助之丞、同僧都村庄屋九左衛門待居る。直に手分、坂部、文助領界(即 国界)下乗より初、宇和嶋領土島の母嶋浦迄測て止宿、一向宗徳法寺。我等、下河辺、青木、稻生領界下乗より初、土州領沖嶋弘瀬浦山上迄測、七ツ頃に弘瀬浦へ着。止宿 本陣中嶋屋善左衛門、脇宿久佐屋友之丞。此夜晴天測

量。

同十三日 朝晴。我等、下河辺、青木、稻生、佐助、同嶋浦下土州と宇和嶋領界より初、昨日測留へ繋ぎ、それより岬へ向、海辺へ引下し海岸今朝測初の領境迄測。坂部、文助、善八、宇和嶋領母嶋浦よりはじめ母嶋浦持の古矢浦を歴て弘瀬浦下 宇和嶋領と土州領界迄測、両手合測、共に四ツ半頃乗船して柏嶋浦へ八ツ半前後着。止宿同前。

同十四日 向所逗留測。朝曇晴。六ツ半頃、我等、下河辺、青木、文助、佐助当柏嶋浦一周を測。坂部、稻生地図を成。それより乗船同浦向地の地先字龍ノ浦より初、一切浦下迄測、又、一切村、柏嶋浦界十一日印杭より初、横切一切浦下迄測。八ツ半頃より掃宿、午後より曇。

同十五日 曇晴。手分。先手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、柏嶋浦六ツ後出立。安満地浦(古は天地浦というよし)字^ノ嶺より初、安満地(此所の漢はよし)浦を歴て橋浦(此所も能楽也)下迄測、後手坂部、柴山、文助、善八柏嶋浦六ツ前出立。乗船一切浦下昨日印杭より初、安満地浦の内字^ノ嶺迄測、後手は八ツ前、先手は七ツ前に橋浦着。本陣庄屋脇左衛門。別宿易治郎。此日四ツ頃より辰巳風にて度々雨。

下河辺、稻生、佐助、一手にて(青木園、別に乗船、我等病氣、共に止宿へ先行)、昨日測留古泊浦より初、(小筑紫浦枝浦)柳浦の内字タツチ迄測、八ツ半頃に小筑紫浦着。止宿。本陣米屋千蔵、秘、米屋寿平。此日午前より辰巳風小雨。

同十八日 朝曇天微雨。同所逗留。五ツ半後より雨。同十九日 朝より雨。同所逗留。夜も辰巳風雨。

同二十日 朝大曇。汐間を見合。五ツ頃より初(即同所逗留)、手分我等、下河辺、青木、稻生(佐助病氣に付、庄作、藤吉、同所(即、小筑紫浦)止宿下より初(先七日嶋岡田を測)、海辺速大海浦を歴て湊浦迄測。それより岡道横切湊浦より伊与野村(所々に家六十四軒)を過て小筑紫浦迄測、九ツ半頃帰宿。坂部、柴山、文助、善八、小筑紫浦止宿下より手分、福良村(家三十軒斗)を過て、小筑紫浦枝浦(家二十軒斗)の内字タツチ迄測、十七日測終へ合す。八ツ前に帰宿。此夜曇る。請問測量、弘見村庄屋内助、二宮村庄屋下村藤左衛門、大嶋浦庄屋小野久左衛門案内。

同二十一日 晚七ツ頃雨。それより大曇。六ツ後小筑紫浦出立。乗船直に雨降出す。我等、下河辺、柴山、稻生、佐助、大嶋浦着て雨止。それより同所止宿下より右人家、左海に添、大嶋浦半周余を測、又、小手分して我等、下河辺、庄作、藤吉、桐嶋一周、成嶋島半周を測、雨降出す。柴山、稻生、大嶋嶋一周を測、雨降出す。坂部、青木、文助、善八、湊浦共に測留より初、小浦枝内野浦、同外浦、それより小浦を歴て同浦字小浦崎迄測、九ツ後に着。我等方は九ツ半頃に大嶋浦着。本陣 庄屋小野久左衛

門、別宿浪人小野善治郎。雨不止。終夜大降。

同二十二日 前夜より続て大雨。同所逗留。八ツ後層層行書状一封、宮崎竹助へ渡。即、高知へ懸送という。それより小雨中、東河、下河辺、稻生、佐助、大嶋浦止宿下より逆測(海を右に、人家を左)、大嶋浦半周を測、昨日測止へ合す。それより引返し市嶋一周を測。坂部、柴山、文助、善八、片嶋一周を測、両手共七ツ後帰宿。雨続て降る。

同二十三日 晚大雨。朝大曇天。六ツ後大嶋浦出立。手分、我等、柴山、下河辺、稻生、佐助、丸嶋、池ノ浦嶋岡田を測、それより乗船。土州、予州界に至り同所より逆に藤津村、それより貝ヶ崎(藤津村の内)、宇須々木村を歴て宿毛村の内(又、加波)村、加波崎にて手分と合測。坂部、青木、文助、善八、二十一日測留小浦崎より初、宿毛村枝坂ノ下村を過、牛背川を渡、宿毛村堤を通り同村枝郷錦村、同宿毛枝郷小深郷浦、大深郷浦、又宿毛村の枝郷(又、加波)村を歴て、加波崎にて手分へ合測。一同に乗船。九ツ半後に宿毛村へ着。本陣大庄屋小野久治右衛門、神小野克治、家作よし、別宿 郷立立田幸治郎。是迄案内。湊浦庄屋団治、小浦庄屋又右衛門、大河浦庄屋喜三郎、暇乞に出る。休泊晴方古井愛蔵、真田源蔵、晴方人見喜助、同断 甲浦、高知より日々手伝人足共是より帰る。

同二十四日 朝曇。四ツ頃より晴天。勘定方松崎忠藏暇乞に出る。秋尾九郎内、宮崎竹助、岡本忠治郎其外出る。それより午前中に食し、無測量にて一同に乗船八ツ頃藤津村に至る。止宿。本陣庄屋又三郎、別宿同人隠宅。此止宿迄部方下役秋尾九郎内、

浦方下役宮崎竹助、横目岡本忠治郎、同広田龜八、

(上三人は甲浦より此所迄日々付添、同窪田内八、今構恵助、高橋武助、岡本鉄作暇乞に出る。山改役池田利作、普請方下役森本喜之助、晴方三木義四郎同断。(此日 間清市郎へ書状認、宮崎竹助に渡す)同二十五日 朝曇天。六ツ後藤津村出立。一同に先、土州、予州国界に至る。土州郡方下役、浜方下役、横目普請方下役、山改役不残界迄送別す。伊予国宇和嶋領郡方吟味役都筑九右衛門、郡方候目銀兵衛、森丈右衛門、小川五郎兵衛、下目付西河平蔵、郷目付宇都宮内吾、今田善右衛門、二宮長太夫界へ出迎。それより手分、我等、下河辺、青木、稻生、佐助、土州、予州界より初、外海浦の内(即本浦を経て同浦地先字西泊迄測。坂部、柴山、文助、善八)西泊より黒崎岬を回り外海浦の内字深浦地字西敷盛迄測、両手共七ツ後外海浦の内深浦着。止宿。本陣 外海庄屋勝之允、別宿組頭利左衛門。此夜曇る。雲間に測量。郡奉行山家佐織出て挨拶あり。外海浦分浦脇本浦、岩水浦、垣内浦、深浦、宮山浦(右二浦を合て一浦)、久良浦、船越浦、境浦、福浦、中泊浦、内泊浦(合十浦いわく外海浦、深浦、止宿庄屋勝之允、以後内海浦も外海浦と同。

伊能図探究 第十一号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図見て歩き (四)

藤岡健夫氏(横浜市在住)蔵 九州第二次測量大図

本図は、数少ない九州地区の大図で、縦八一センチ×横一七七センチ、軸装されている。保存良好で、退色はない。補修した虫食い跡はあり、その後の虫食いも多少ある。描図範囲は人吉の外れから西米良迄で、種子島・屋久島測量終了後、坂部隊が、文化九年六月五日人吉城下泊、六日免田村、七日湯前村、八日津留谷村(西米良町)に宿泊して測量した部分を描いている。最終版大図の区分とは合わないから、九州測量直後の大図と考えるべきであろう。このルートは第二次測量でしか通っていないので、九州第二次測量の大図である。

朱の測線に沿って、村名、領主名、沿道風景を描いており、大図の様式を備えている。違いを云えば、隣接図との接合記号のコンパスローズが描かれていない。余白に雲形を描くが、これは他の大図にはない。また、図の中央に未記入のコンパスローズのための余白がある。南が上になっている。村名、領主名が朱書きである。などがあげられる。朱書きの地名は、ほかにも例があるが、試行されたようである。

針穴は鮮明であり、伊能測量隊によって作成されたことは確実ともわれる。描図方式の若干の違いから、正式な提出図の構成ではなく、別途に制作された大図と考えられる。もっとも、九州第二次測量だけの大、中、小図が作られたかどうかは分からない。(大谷亮吉氏も触

れていない) なぜなら、もう中間製品をつくる必要はなかったからである。

本図の位置づけとしては、最終版の図割り以前に、これまでと同じ方式で描かれた作品のような気がする。

描図の詳細を眺めると、彩色は濃く鮮明で、近い伊能図を探せといわれれば、東京国立博物館の中図が一番近い。描図は丁寧で、沿道描写は細かく、文字は達筆である。

全くの憶測であるが、九州第二次測量の大図は、最終版にとりかかるので、つくらないことになったあと、記念のため、あるいは諸侯その他への贈呈用に、特定の場所だけ数枚制作した可能性がないだろうか。そうであれば、特別版なのだから、他の大図と様式が少し違う理由はずべて説明がつく。

最終版大図の副本といえるものは、平戸の松浦史料博物館所蔵の平戸、杵岐、五島、佐世保・長崎の四軸と山口県文書館毛利文庫の七枚しか明らかでない。ほかに、写本が国立歴史民俗博物館に三枚あることが知られているのみである。本図は貴重な存在である。

ついであるが、沿海地図大図は六九枚伊能忠敬記念館に揃っている。これはこれで素晴らしいものであるが、彩色、描画法などが、最終版大図と較べると違っている。

(追記)

なお、京都大学の図書館に九州第二次測量時の大図の稿本が七舗あることがわかったので、稿をあらためて報告する。



图1 藤岡健夫氏藏 伊能大図



图2 藤岡健夫氏藏 伊能大図（部分）

国立公文書館内閣文庫蔵 特別小図 (皇国全図)

日本国地理測量之図および東三十三国沿海測量之図(沿海地図)の二舗を大形の木箱(縦八〇センチ、横六〇センチ程度)に収納する。日本国地理測量之図は、伊能特別小図の周辺に多数の各種数値表を配置したものである。東三十三国沿海測量之図は沿海地図小図の縮尺を1/2にしたものに、数個の数値表を配する。両図とも徳川幕府の紅葉山文庫本と伝える。

日本国地理測量之図 四六八×四三二センチ

紙面の中央に伊能特別小図を配し、周辺に多数の各種数値表を並べた超大形地図。お城の大広間か、寺院の本堂でなければ広げられない大きさである。このような地図を何の目的で作ったか理解しかねる大形図である。日本国一覽図だが、実用にはならないから展示用であるうか。

縮尺1:864,000、他の伊能図とちがいに測線を黒線で描く。かつ、測線の屈折点毎に横にケバを出す。山岳等は少数の著名なもののみを記し、山の部分だけを緑で彩色する。全体的には色のない部分が多い。経緯線を太い墨線で描く。方位線はない。国名は朱の二重矩形枠のなかに、郡名はピンクで塗りつぶした楕円のなかに記す。国境は鎖線。宿駅○、城下□、郡界●、湊△、寺院△、がある。その他、地名に●印(沿海、街道)とか黒丸(内陸部)を付した地名が数多く見られるが意味は不明である。文字はあまりうまくない。記号も手書きで上手ではない。全体に描画は粗である。写本。針穴はない。

保存良好、虫食いなし。主要な地点について、図中欄外にその地の経緯度、日本橋からの里程等を記す。描画範囲は蝦夷南東岸まで。

(例) 上総国富津 極高三五度一八分半 経度 何々

日本橋より里程 何々

掲載されている各種数値表の名称をあげる。

蝦夷地船路里程 蝦夷地の数(緯度表) 自松前東海里程

東山道郡名 山岳方位表二表

道路里程表四表 郡邑島嶼異称五表

地名緯度表七表 伊豆国島嶼実測

東海道十五カ国一三〇郡 佐渡国実測

山岳島嶼方位 北陸道 何国何郡

自松前西海路程 奥州蝦夷地距離表

蝦夷地方位表 畿内五カ国五五郡

山陰道八カ国四八郡 南海道六カ国五三郡

西海道九カ国九六郡 島嶼通計

沿海周海里程 湖沼周圍里程

題(識語)は左上部の、大形の枠内にあり、「真形分間之図」という。漢文の楷書体。末尾に 東都楽水堂主人謹題とある。

東三十三国沿海測量之図 二六五×二二五センチ

沿海地図小図の範囲を特別小図の縮尺1:864,000で描き、周辺に凡例と各種数値表を配する。写本。針穴なし。国界一、郡界●、宿駅○、城下□、天測地点☆、および天測した宿駅△、国名(二重矩形枠)、郡名(一重矩形ピンク色)、著名山岳(黄色の矩形上部三角の枠内に名称)、湊、など表示する。

文字は稚拙、彩色は緑(濃緑)が殆どなく、著名目標山岳周辺に少しだけ。水色は鮮明。経緯線なく、方位線はある。保存良好で、虫食

い少ない。測線は黒線、測線の上に●、○、等の表示があり描図が粗である。記号（合印）は手書きもあり丁寧でない。折本。裏打ち済み。太鼓谷稲成神社、宮内庁書陵部にも同種類のセットが保管されている。また、日本全図がありながら、沿海地図の特別小図をセットとした意味もよくわからない。

（九五、九、二六 調査 貴重書）

国立歴史民俗博物館蔵 伊能図（秋岡コレクション）について

一、所蔵図の種類と概要

国立歴史民俗博物館所蔵の伊能図八舗はつぎのとおりである。写真と対比して説明すればよいのだが、なかなか機会がなく、頁数の都合もあるので、調査結果だけを列挙する。

（一）寛政一二年上呈の小図 一舗

今井政太郎という人が制作の五年後位に写した写本。針穴はない。

（二）寛政一二年上呈の大図

大田原付近一舗 写本。針穴はない。裏に「第六九下野」とある。

福島より須賀川辺一舗 写本。針穴はない。左下隅に「第五六陸

奥」とある。

（三）文政四年中図 中四国

一舗 写本。針穴はない。軸装済み。方位線はあるが、経緯線、

接合記号のコンパスローズはない。国界、郡界、宿駅、城下、社寺の記載がない。

（四）文政四年大図

明石、岡山付近、信州飯山付近の三舗を蔵する。何れも写本。針穴はない。明石と岡山・飯山では、描画様式がことなる。明石は

淡彩で、細かい文字。他は彩色が鮮明で、文字が大型である。

（五）江戸府内図（南部）

汚れ、退色が目立つ。写本。針穴はない。

二、寛政一二年小図 二〇五×一三六センチ

右下隅に「享和元辛酉歲五月今井政太郎之を写す」とあり、隣に黒度は是、朱之度誤り」と記す。経緯線が赤黒二種引いてあり、赤は間違っている。おもうに、はじめから朱で経緯線を引くとは思われないから、黒の線が間違いとして、朱で訂正してみたが、やはり黒でよいと訂正したのではなからうか。

このあたりは、伊能図として問題の部分だから十分な検討を要するが、写した人は天文測量の関係者ではないかと思わせる記事である。

旧蔵者の秋岡氏はこのことに触れていない。

描図は粗で、他の写図のような繊細さはない。蝦夷地の彩色に紫が強い。また、蝦夷地では測線の間宿駅の印を缺んでいる。奥州街道では宿駅、城下の表示を測線の傍らに記すが、フリーハンドで描く。字は大きく上手ではない。コンパスローズは他の図に見られない簡略なものである。

本図は、関係者が自分の覚えのために横写したような感じで、保存目的あるいは命令でおこなわれたものではないようである。

三、伊能中図 中四国の部 二〇二、五×一五二センチ

左縁の部分の一部が滅失している。周辺には汚れが多い。元は折本だったものを軸装している。秋岡蔵書の印の他に記録はない。写本。針穴はない。方位線はあるが、経緯線はない。コンパスローズもない。緑の色調は国土地理院の図に同じである。国名、郡名には枠がない。

国界、郡界の記号、宿駅、社寺、城下、天測点の記号も見当たらない。地名は細字で書き込むが、あまり達筆ではない。全体として完成度は高くないが、文政4年中図の現存数は多くはないので貴重である。

四、寛政一二年大図 大田原付近 一二五×一九四センチ

大田原近くの街道を朱の測線がはしっている。街道筋に並木、家並みを絵画的に描き、田畑の田園風景を書き加える。大田原の城と城下の風景も見られる。写本。針穴はない。裏打ち済み。

領分境、宿駅、天測点の記入がある。その他の記号は見られない。方位線、経緯線はない。緑色は青味が強いが、彩色は鮮明である。地名は岡山付近の大図と同様な大きな文字で書き込む。汚れ、虫食いが少しあるが目立たない。

五、寛政一二年大図 福島より須賀川付近 一二四×一九四センチ

大田原付近と同系統の描図。写本。針穴はない。領主名、宿駅、天測地点と沿道風景を描く。郡界は、○○郡・△△郡境と文字で示す。文字は大きめ、傷みはひどくない。方位線、経緯線はない。コンパスローズが多く六個もある。左下隅に「第五六陸奥」とある。元折本。裏打ち済み。

六、文政四年大図 明石 一二三×一五七センチ

やや退色があるが鮮明で、美麗。彩色は淡彩。針穴はない。写本。来歴を推測できるような書き込みはない。朱の測線に沿って、地名、宿駅○、天測地点☆、湊♣、神社八、寺院△、田園風景(森、田畑)を描く。方位線、経緯線はない。国名、国界、郡名、郡界もない。また、明石、岸和田等城下には城の景観を墨絵的に描くが、領主名はな

い。河川は川幅を持たせて、小河川まで丁寧に描く。山景はグレーがかった緑。地名の文字は細かい。

七、文政四年大図 信州・飯山辺り 一四五×一二四センチ

明石の大図とは別系統の図。緑色が東博中図と同じで、濃い彩色。地名の文字が大形で地図のなかで目立つ。領主名を記入。城下では城の絵が目立つ。経緯線、方位線はない。針穴のない写本。宿駅の○印がやや大きく、天測地点☆の記入がある。沿道風景を田園風に描く。沿道に見える主要な山岳をリアルに描写し、山腹には樹木を配し、個々の山名も記す。国名、郡名はない。虫食い、汚れがある。元折本。裏打ち済み。

八、文政四年大図 児島湾 西大寺 一二五×一八五センチ

飯山の大図より文字はさらに大形で、景観を達筆な文字が覆う感じがする。天測地点☆、宿駅○の表示があり、ほとんどが池田藩領だが、他の領主名も見られる。緑色は明石図と飯山図の中間的で、東博中図より若干黄味が少ない。沿道風景描写は他図に同じ。三枚の大図のうちでは、最も彩色バランスが良い。写本。針穴はない。虫、傷は少ない。経緯線、方位線、国界、郡界はない。元折本。裏打ち済み。

九、江戸府内図 (南部) 二〇二×三一五センチ

写本。針穴はない。汚れ、カビの跡が多い。特に周辺部は良くない。退色も進んでいる。地図自体は江戸図の形式を備え、文字も良い。丁寧に制作されたもの。保管が悪かったのは残念である。裏打ち済み。

(九五、九、二一、調査)

貴重書扱いで、事前申請して熟覧を認められる。大型の桐箱(フタなし)に収納する。高橋景保からシーボルトに渡されたが、取り返しとされている図である。表題は蝦夷図とあるのを朱で日本図と訂正している。縮尺は小図の1/2の、1:864,000、樺太から九州まで日本全土を三枚でカバーする。

(一) 蝦夷地図 一三〇×一一四センチ

北海道、樺太ならびに樺太対岸の黒竜江河口付近を描図範囲とする。地形は不正確である。樺太の緯線は、地形上北緯50度あたりと思われる付近に48度線がある。北海道の地形は現在の地図とはかなり違っている。

内陸部を貫通する測線が数本あり、針穴も明らかである。作成時期は最終版完成後と考えられるので、地形が異なるのは納得できないが、測線は最終版より詳細である。間宮林蔵の測線を追加したのであろうか。北蝦夷(樺太)も含めすべてに針穴があるところを見ると、忠敬と同じ方法で下図を書き、これを転写したと思われるが、誤差が大きすぎる感じである。

地名はカナ書きで、河川は支流まで詳細に記入する。主要な河川沿いに測線が走り、河川の縁に沿って地名が並んでいる。舟で遡上したのであろうか。経緯線は太めである。方位線はない。測線は細い。山景の緑は東博中図の色と同じである。カナ文字は細字。宿駅、国名、国界、郡名、郡界等は記入しない。黒竜江河口付近も詳しく踏査した様子で、測線が走り、地名が詳しい。

虫食い・傷みは殆どない。忠敬の測量部分以外についても針穴

は鮮明である。裏打ち済み。

(二) 西日本図 一三〇×一一四センチ

描図は他の伊能特別小図に同じである。経緯線がある。経線の中度は京都とする。方位線はない。虫食いなく、針穴は明瞭である。カナ書きの地名の楷書は達筆である。

測線は朱の極細で、省略せずに総てを網羅する感じである。郡名は黄色の楕円内に漢字。国名は四角の枠内に漢字。ともにカナは振らない。宿駅、郡界はなく、著名な山岳のみを描いている。国界の黒線が目立つ。主要河川を描くが、河川名はない。九州の幅は広いので、九州測量後の製作である。

(三) 東日本図 一三〇×一一四センチ

全体に西日本に比し、書き込みが粗である。地名が荒い。測線はすべてを描いている。針穴明瞭、文字達筆である。

(九五、八、二四、調査)



伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号から。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

投稿規定

・会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

・一頁は、二段組三一字×二六行×二段で一六一二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿の返却は致しません。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四

飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺一郎)

(三) 送金先 郵便振替口座 〇〇二五〇・六・〇七二八六一〇

伊能忠敬研究会あて

三、本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禧良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探究会代表、会社会長)
(五十音順)

四、会員で会報の追加希望は一部五〇〇円としました。

編集後記

●伊能家先代の故伊能敬(武蔵大学名誉教授)氏が、佐原市主催の生涯教育の大会に、パネリストとして出演するために書かれたメモを、預かっていた小島一仁氏ならびに伊能昌子(敬氏夫人)氏の御好意により掲載させていただきました。大会の直前に病気となられ使われなかったものです。

●会員の河島悦子さん(旧長崎街道を歩く会主宰)が、伊能家第八代伊能淳氏の序文いりで、「伊能図で甦る古の夢・長崎街道」全カラー一六五頁を出版しました。(TVも放映)現代図に旧長崎街道を描き名所・旧跡を紹介。定価二二〇〇円送料込。(照会先 〒八一一一三三三宗像郡津屋崎町大字津屋崎二二三三七)

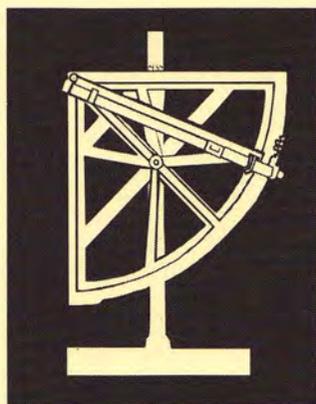
●鹿島高校教諭の大久保錦一氏が、「夢に挑んだ先人たち」と題し、忠敬などに関する碑文等の読み下しと解説書を出版した。(潮来町潮来九一五の一、定価二二〇〇円)非会員。

(渡)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.11 Spring 1997



REPORTS

Ino Tadataka and His Land Survey ScaleFUJIOKA Takeo 1

LECTURE

My Encounter with Ino TadatakaKOJIMA Kazuhito 5

REPORTS

The Life of Ino TadatakaINO Takashi 10

MATERIALS

Family Documents

Thank You Very Much, Mr. SAKABEANDO Yukiko 12

Process of Making Ino's Grave at Genkuji Temple (2).....INO Yoko 17

Regional Materials

Remains in Matsuo District, Hino Town, Shiga PrefectureKATORI Kiyoshi 20

INO'S Land Survey Diary

The Sixth Survey Diary (4)SAKUMA Tatsuo 23

THE SEARCH FOR INO'S MAPS

Large Scale Map of Kyūshū, Private Collection of Mr. FUJIOKA Takeo 27

Special Small Scale Map, National Archive Collection..... 29

INO'S Maps (Akioka Collection), National Museum of History and Anthropology 30

INO'S Special Small Scale Maps of The National Diet Library 32

OTHER NEWS 33

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY